

第4章 動詞接頭辞付加の感情的側面

アスペクトには、第2章や第3章で論じた PFV と IPFV の対立アスペクトのほかにも、個別的なアスペクトの意味が存在する。その中には接頭辞 *pa-* が示す「少し」という、動作の低い集中性や少量性を示す縮減 (attenuative) アスペクトがある。これは指小 (diminutive) アスペクトとも呼ばれる。

本章では、スラヴ諸語における縮減アスペクトの先行研究における動作の量的評価と感情的評価のつながりの指摘を元に、“ものの小ささ”を示す名詞の指小形と“動作の小ささ”を示す縮減アスペクトの *pa-* 動詞をラトヴィア語において比較し、動詞接頭辞付加の感情的側面を論じる。

まず名詞の指小形の形態や機能を概略した上で、指小とアスペクトのカテゴリーに共通する感情的側面、表現的側面、また言語文化論の批判を整理し、異なるカテゴリーに属する言語形式を相関させるための土台を得る。次に接頭辞 *pa-* の意味記述を行い、接頭辞が様々な語彙の意味の基動詞に付加されることを確認する。そして文脈やテキストの性格を考慮に入れた具体的な用例において、*pa-* 動詞が縮減アスペクトを通じて、動作やそれに関連する事象に対する話者の主観的評価を示し得ることを記述する。

4.1. スラヴ諸語における縮減アスペクト⁶³の *po-* 動詞の先行研究

ポーランド語の接頭辞 *po-* を論じた Piernikarski は、動作の短い時間限定よりも動作に関わる主体の内面の状態を示す *po-* 動詞に情緒的な (肯定的・否定的) ニュアンスがあることを指摘し、「情緒・結果の動詞 (czasowniki afektywno-rezultatywne)」と呼んでいる (Piernikarski 1969, 130-132, Piernikarski 1975, 18)。pośmiać się「少し笑う」、poskakać「少しジャンプする」、potańczyć「少し踊る」などの *po-* 動詞では、接頭辞 *po-* が規定する量の少なさが、部分的な、不完全な、弱い程度の動作の実現も、短い持続時間も示さず、主体が動作に関与する程度、または動作が主体に及ぼす程度の低さを示すとしている (Piernikarski 1975, 30)。

アスペクト論において、感情や評価といった主観的な要素とアスペクトとのつながりを指摘した研究は少ない。しかし Piernikarski は、動作の主体の内面の状態は、動作の持続する時間において動作が主体に及ぼす影響の“副産物”であり、動作の量的な評価から情緒的な評価 (ocena afektywna) への移行があること、そしてその移行が流動的であることを指摘している (Piernikarski 1969, 131, Piernikarski 1975, 28)。また、言語記号が現実を切り取るだけではなく人の心理的反応や評価を反映する例として、名詞 słońce「太陽」とその指小形 słonko を挙げ、指小形が指小という客観的内容の他に、そのものへの話者の態度を伝えているとしている (Piernikarski 1975, 28)。しかし Piernikarski の研究の中心は、接頭辞 *po-* の縮

⁶³ ロシア語学においては、完了体・不完了体の文法的対立をなすアスペクトとは別に、接辞を使った派生形態論による具体的で語彙的なアスペクトの意味である動作様式、またはアクションアルトがあることから、「縮減の動作様式」と呼ぶことがある。しかし本論文では便宜上、縮減アスペクトと呼ぶ。

減アスペクトよりも PFV 化の機能や「少しずつ」行われる動作を示す分配 (distributive) アスペクトの意味であり、縮減アスペクトについてはあまり論じていない。

次の 4.2. で詳しく述べるように、量的な評価の他に感情的な評価が指小形に認められることは指小のカテゴリーの研究において一般に広く理解されている。Piernikarski がアスペクト論に基づく po-動詞の研究において指小形を例として挙げたのは、動作の「小ささ」の判断が話者に拠っていること、そしてその量的な評価から感情的な評価の移行が様々なアスペクトの中でも特に縮減アスペクトに認められることを示している。

Petruxina が「話者の動作に対する感情的態度は時間の捉え方に影響する」(Petruxina 2011, 147) と述べるように、ロシア語やその他のスラヴ諸語との対照研究においては po-動詞における量的評価と感情的評価の交差が指摘されている (Stawnicka 2005, Petruxina 2011)。

文脈やコミュニケーション論をより考慮に入れたアスペクト論の立場からは、Karavanov と Mustajoki & Pussinen によるロシア語の縮減アスペクトの po-動詞の先行研究がある (Karavanov 2006, Mustajoki & Pussinen 2008)。

縮減アスペクトを示す接頭辞はロシア語において複数ある。Karavanov はその中でも、文体的色彩のある縮減アスペクトの接頭辞 po-においては、実際の動作のアスペクトを示す明示的意味 (denotativnoe značenie) よりも、動作に対する話者の主観的態度を示す副次的意味 (modusnoe značenie) が強いとしている。Karavanov は明言していないものの、語や文が示す意味の中に客観的なものと主観的なものが存在するという立場は、Bally が提唱した dictum と modus の関係を前提としていると考えられる。

Karavanov は、辞書記述をもとに縮減アスペクトの動詞を 2 つに分けている。

- (a) 「少しずつ」「少し」「幾分か」「ある程度」などの語彙で縮減アスペクトが説明される (poprivyknut' 「少し慣れる」: privyknut' 「慣れる」)
- (b) 縮減アスペクトの意味がそもそも明示されなかったり、元の動詞と同じとされる (popridumat' 「思いつく」 = pridumat' 「思いつく」)

しかし (a) のように、辞書記述で縮減アスペクトを示す語により凡例づけがなされていても、実際の用例を見ると、動詞の意味が「少し、幾分」という動作の低い集中性とは結びつかず、実際には動作の高い集中性が示されることがあると Karavanov は指摘している。

poprigljadet'

Razg. Prigljadet' nemnogo, neskol'ko. 口語: 「少し、幾分見やる」

例文 4-1 (Karavanov 2006, 106)

Čto ty, govorit, Martyn, ne poprigljadiš sebe mestiška kakogo, ved' von vesna nastupaet?

ちょっと Martyn、もう春が来るっていうのに場所を見つけていないの？

popridavit'

Razg. Pridavit' nemnogo, neskol'ko. 口語：「少し、幾分踏みつける」

例文 4-2 (Karavanov 2006, 106)

Nu sani, razumeetsja, čerez menja proexali, popridavili grud'.

ソリは当然のことながら私を引き、胸が踏みつぶされた。

Karavanov によれば、例文 4-1 では話者は po-動詞を使うことで聞き手がまだ自分の場所を見つけていないことを責め、例文 4-2 では po-動詞が「少し、幾分」と矛盾する「とても強く」という意味で用いられているか、po-動詞によって話者は自分の身に起きた出来事を取るに足らないこととして捉え、皮肉的に評価をしているという二通りの解釈が可能であるとしている (Karavanov 2006, 106)。

Karavanov はまた、単に話者の主観的態度が示される副次的な (modus) 意味を示す動詞として、poprižat' 「つねる、懲らしめる」と porasskazat' 「話す」を挙げている。

例文 4-3 (Karavanov 2006, 108)

Administracija ego poprižala.

責任者たちは彼を懲らしめてやった。

例文 4-4 (Karavanov 2006, 108)

Oni o tebe koe-čto porasskazali.

奴らがお前のことをなにか話してたよ。

以上の点をまとめると、縮減アスペクトの意味が明示的で、客観的なアスペクトの動作を一般に示す (a) のタイプの po-動詞に対し、(b) のタイプの po-動詞は「時間における動作の流れを特徴づけるのではなく、出来事や人物に対する個人的な態度を示し、副次的 (modus) で主観的」である (Karavanov 2004, 107)。

Mustajoki & Pussinen は新聞を題材にロシア語の po-動詞を分析し、コミュニケーション行為の効果性の観点から po-動詞の選択とその機能を分析している。彼らによれば、po-動詞の選択の可能性がある時、接頭辞 po-の有無は文の命題には影響を及ぼさず、コミュニケーション上の効果の点でのみ差異が生まれる。このように、事実を単に伝えるだけでなく、読み手の関心を引き、信頼を獲得するために書き手が選ぶ語彙や語形を「機能・命題的パスワード (funkcional'no-propozicional'nye slovo-paroli)」としている。この「機能・命題的パスワード」としての po-動詞は、書き手と読み手の距離を縮める言語手段として、「文脈の新しい意味や文法的特徴を書き手に作らせ、発話の認知度を拡大、強化し、描写される出来事を感情的・表現的に目立つ (aktual'nyj) ものとし、コミュニケーション行為の成功を保証するものである」としている (Mustajoki & Pussinen 2008, 265-266, 273)。

接頭辞 *po-*が担うコミュニケーション上の機能とは、①接頭辞 *po-*が描写する行為を強調し、動作の程度を増大させ、言語的には示されない動作の質に読み手の注意を喚起し、②動作の結果に注目を向けさせるほか、③状況や発話の対象への主観的評価（一般に否定的評価）を示すことである。そして「命題を様々なレベルで修正する *po-*動詞は、ある行為を個人的なものとして (*ličnostno*) 描写し、言語の潜在力 (*jazykovej potencial*) を創造的に、個人的に利用するための、最も手軽で多くの人に必要とされる手段となった」と結論づけている (Mustajoki & Pussinen 2008, 269-273)。

Mustajoki & Pussinen が挙げた接頭辞 *po-*の3つの機能は、アスペク的な意味（動作の程度と結果）の表示と読み手の注意の喚起（①と②）、そして主観的評価の表示（③）に大きく分けられるが、どちらも書き手の関与があるという点で共通している。アスペク的な意味への注意の喚起と同様に、主観的評価の表示もまた書き手自身の判断であり、主観的評価の表示も読み手の注意を喚起する可能性があるからである。

Piernikarski と同様に Karavanov もまた、明示的な意味を元にした副次的意味が明示の意味よりも前面に現れる名詞の語形成の手段として指小辞を挙げ、「指小辞は、場合によってはいかなる指小の意味も示さず、単にものに対する話者の主観的態度を示しうる」としている (Karavanov 2006, 107)。

ラトヴィア語では、スラヴ諸語の接頭辞 *po-*に対応する接頭辞 *pa-*があり⁶⁴、動作の短い継続時間を示す限定 (*delimitative*) アスペクトと、「少し」の動作を示す縮減アスペクトを示す。またラトヴィア語の指小形はスラヴ諸語と同様に、指小辞により生産的に形成される。よって、スラヴ諸語の先行研究をもとに、ラトヴィア語の *pa-*動詞と名詞の指小形を比較することに問題はない。

動詞中心のカテゴリーであるアスペクトの中の縮減アスペクトと、名詞中心のカテゴリーである指小という、品詞をまたがるカテゴリーの比較は考察の価値がある。動作の内的時間の反映のされ方を研究するアスペクト論は、アスペクト対立や動詞の語彙的意味との関係といった、客観的な側面の研究が一般的である。しかし話者の主観的評価や文体論といった、論理的説明や記述が難しい言語の主観的な側面の研究はあまりなされてこなかった。そこで、感情的側面や表現的側面の研究が発展している名詞の指小を縮減アスペクトと関連させることで、アスペクトと主観的評価のつながりの研究の可能性が広がることが期待される。

4.2. ラトヴィア語における指小形

ラトヴィア語の生産的な指小辞は2つ (*-iņ-*と*-īt-*) あり、名詞の曲用タイプにより使い分けられる (表 4-1)。

⁶⁴ 接頭辞 *pa-*も前置詞 *pa* もバルト・スラヴ語共通の接頭辞、前置詞とされる (Endzelins 1971, 441, 592)。

表 4-1：ラトヴィア語の主な指小辞

名詞の曲用タイプ	指小辞	元の名詞	指小形
第 1 変化 (a-語幹)	-iņ-	galds 「机」	galdiņš
第 2 変化 (ja-語幹)	-īt-	skapis 「棚」	skapītis
第 3 変化 (u-語幹)	-iņ-	tirgus 「市場」	tirdziņš
第 4 変化 (ā-語幹)	-iņ-	grāmata 「本」	grāmatiņa
第 5 変化 (ē-語幹)	-īt-	roze 「バラ」	rozīte
第 6 変化 (i-語幹)	-iņ-	pirts 「サウナ」	pirtiņa

名詞への指小辞の付加により、名詞が指すものの小ささが示される。例文 4-5 では話者 A が名詞 *ievads* 「前置き」を用い、話者 B がその指小形 *ievadiņš* で言い直し、前置きの規模を明確化している。話者 B に応じて話者 A も指小形を繰り返すことで、明確化された前置きの規模に同意している。ここでは形容詞 *mazs* 「小さい」も指小形 *maziņš* となっている。

例文 4-5 (LR. 06.04.2011)

A: Nu tagad tas tāds *ievads*...
 助 今 その そのような 前置き

B: *ievadiņš*.
 前置き-指

A: *ievadiņš*, *maziņš*, jā.
 前置き-指 小さい-指 はい

A: 今から話すのは、まあ前置きなんだけど...

B: ちょっとした前置き (指小形) ね。

A: ちょっとした前置き (指小形)、ちっちゃい (指小形)、そうだね。

指小形の意味には相互に関連する客観的意味と主観的意味の 2 つの側面があることは通言語的に知られている (Nieuwenhuis 1985, Jurafsky 1996)。ラトヴィア語も例外ではない。『標準語文法』も *-iņ-* などの指小辞⁶⁵ について、「実際の指小」と「感情・主観的評価」の両方に

⁶⁵ Rūķe-Draviņa は、指小の意味を持ちうる 58 の接尾辞を挙げている (Rūķe-Draviņa 1959)。表 4-1 で挙げた以外の接尾辞を以下にいくつか示す。

-el-	行為者名詞、動物、植物、ものや抽象名詞を指すが、現在では名詞の指小化が最も生産的であり、ものの小ささや主観的評価を加える (『標準語文法』1959, 93-95)。 例: <i>vīrelis</i> : <i>vīrs</i> 「夫」 <i>puīselis</i> : <i>puisis</i> 「男の子」 <i>sievele</i> : <i>sieva</i> 「妻」
-en-	動物の雌、ベリー類、キノコ類を示すが、名詞には否定的評価を示す (『標準語文法』1959, 95-102)。 例: <i>cūcene</i> 「チチタケ」「雌豚 (否定的評価)」: <i>cūka</i> 「豚」
-ēn-	動物の子供を示すが、人を指す名詞を指小化する (『標準語文法』1959, 109-112)。 例: <i>zagliēns</i> : <i>zagls</i> 「泥棒」 <i>puisiēns</i> : <i>puisis</i> 「男の子」 <i>meitenēns</i> : <i>meitene</i> 「少女」
-ul-	人やものを示す名詞を動詞から派生させるが、否定的な評価が加わることがある。指小の意味は失いつつあり、指小辞として生産的なのは固有名詞のみである (『標準語文法』1959, 155-157)。 例: <i>Annule</i> : <i>Anna</i> (女性名) <i>Marule</i> : <i>Mare</i> (女性名)
-uk-	本文で挙げた <i>-iņ-</i> や <i>-īt-</i> よりも口語で使われることが多い。『標準語文法』では記述されていない。 <i>bērņuks</i> : <i>bērns</i> 「子供」 <i>lāčuks</i> : <i>lācis</i> 「熊」 <i>Ievuks</i> : <i>Ieva</i> (女性名)

触れている (『標準語文法』1959, 112-121)。Rūķe-Draviņa によるラトヴィア語の指小形についての博士論文では、ものの小ささを示す実際の指小ではなく、指小形の意味機能や用法に記述の大部分が割かれている (Rūķe-Draviņa 1959)。

指小形は、多かれ少なかれ客観的に判断されるものの大きさを示す。しかし指小形はものに対する話者の主観的評価も示す。その主観的評価は、愛情、好意、親しみから、皮肉や軽蔑に至り、人間の感情と同様に多様で複雑である。

指小形の客観的意味は、明示的な視点から客観的に実証される。育児雑誌『わたしの赤ちゃん (Mans Mazais)』からの例文 4-6 では、一連の子供服が指小形で示されている。

例文 4-6 (MM. 6.2010)

(..) uzadīju vairākus kombinezoņus, jačiņas, biksītes, cepurītes,
編む-過1単 複数の チョッキ-複対-指 ジャケット-複対-指 スボン-複対-指 帽子-複対-指
zābacīnus (..).
ブーツ-複対-指
私はチョッキ (指小形)、ジャケット (指小形)、ズボン (指小形)、帽子 (指小形)、ブーツ (指小形) を
いくつも編んであげた。

しかし指小形の持つ客観的側面と主観的側面が、1つの指小形の中に同時に組み合わせられることはよく知られており、『標準語文法』でも同様の指摘がなされている (『標準語文法』1959, 113)。指小形は子供への呼びかけや、子供に関連する事象について用いられることが多いことを鑑みると (Rūķe-Draviņa 1959, 25-37, Nieuwenhuis 1985, 80, Jurafsky 1996, 563)、例文 4-6 でも実際の子供服の小ささ以外に、母親の子供に対する愛情を見出すことができよう。

例文 4-7 では名詞 *business* 「ビジネス」とその指小形 *biznesiņš* が用いられている。書き手は *nu, vai* 「まあ、もしくは」と表現を訂正して意識的に指小形を加えている。ここで話題となっている開店したばかりの店の規模は大きいものではなく、指小形はそのビジネスの規模を明確化している。一方で、書き手はその後に続く肯定的な意味の3つの形容詞と共に、指小形を用いることで事業に対する肯定的評価を示している。

例文 4-7 (K. 7.2010)

Tas tad arī ir Mārtiņa (..) jaunais bizness. Nu vai biznesiņš. Gards,
それ それでは も be-現3 Mārtiņš-属 新しい ビジネス 助 または ビジネス-指 おいしい
sātīgs, un galvenais, savējais.
お腹を満たす そして 重要なことに 自分の
それはまた Mārtiņš の新しい ビジネス でもある。小高い (指小形) とでも言おうか。おいしく、お腹を満たし、何よりも、自分流の。

例文 4-8 では名詞 *projekts* 「プロジェクト」とその指小形 *projektiņš* が用いられている。話者は名詞を指小形にすることで、プロジェクトの規模の小ささを示している。指小形が「A は A だ」という同語反復の中で用いられることにより、プロジェクトの属性 (ここでは指

小) が強調されている。逆接の接続詞 *bet* 「しかし」が続くことで譲歩の意味も示され、話者は自身のプロジェクトを過小評価している。

例文 4-8 (LR. 22.10.2009)

Strādāju vienu labdarības projektu (..). Projektinš ir projektinš, bet
 働く-過1単 ある ボランティア-属 プロジェクト-対 プロジェクト-指 *be-現3* プロジェクト-指 しかし
 gribēju es kaut ko tādu, kas ir visu mūžu.
 したい-過 私 何かを-対 そのような 関代 *be-現3* すべて 一生-対
 あるボランティアのプロジェクトで働いた。プロジェクト(指小形)は所詮プロジェクト(指小形)だけ
 ど、一生残るようなものにしたかった。

一般に、客観的なものの小ささや主観的評価、もしくはその両方が示す対象は、指小化された名詞が示すものに対してであると理解される。例文 4-7 ではビジネスの規模と肯定的評価、例文 4-8 ではプロジェクトの規模とその過小評価などが指小形により表されている。しかし例文 4-6 では、子供服の小ささを示す指小形は、その持ち主、つまり指小化されたものに関連した子供への愛着を示した。

次の例文 4-9 では話者がインターネットのサイトを宣伝しており、そのサイトへの登録を聞き手に呼びかけている。ここで用いられている名詞 *e-pasta adrese* 「E メールアドレス」の指小形 *e-pasta adresīte* では、話者は E メールアドレス自体に対して何らかの態度を示しているだろうか。そもそも E メールアドレス自体にどんな態度を持ちうるだろうか。ここでは E メールアドレスの短さはもちろん、E メールアドレスへの好意や侮蔑といった肯定的、あるいは否定的評価を話者が示しているとは考えにくい。

例文 4-9 (LR. 09.02.2010)

Atkal tur vajadzīga tikai e-pasta adresīte apstiprināšanai.
 再び そこで 必要である だけ Eメール-属 アドレス-指 承認-与
 そこでもたまた必要になるのは、認証用の E メールアドレス(指小形)だけです。

ロシア語の指小形を分析した Volek は、指小形の使用が、話者の呼びかける相手への態度や、コミュニケーションを効果的に行うための意図に大きく依存していることを強調している。なぜなら指小形は、「派生した指小形の基語 (the base of the diminutive derivative) が示す現象と、それが示さない現象の両方に対する呼びかけ者 (addressor) の感情的態度を示す能力」を持ち、ある場合において「指小形は言語外現実のある現象に対する感情的評価を表現するための媒介の役割を果たしているに過ぎない」からである (Volek 1987, 149-150)。これは、指小形が示す主観的評価が、指小形が示す現象の中だけに留まらず、テキストや発話全体に広がることを示している。

文脈を考慮に入れた場合、例文 4-9 の「E メールアドレス」は話者が聞き手に対して促す行為 (サイトへの登録) の手段となっており、指小形はその行為のたやすさを示す役割を

果たしている。この行為が煩瑣であることは副詞 *atkal* 「また」により示されているが、副詞 *tikai* 「だけ」と共に指小形がそれを打ち消している。ここでの指小形の使用は、聞き手への働きかけを円滑にする役割を担っている。

指小形が単独でテキストや発話全体に影響を及ぼすことから、指小形の研究は形態論だけでなく語用論からの研究の必要にも迫られてきた。例えば Nieuwenhuis は指小形の類型論を論じ、丁寧、未熟、起源・子孫、関係性、類似性、集団、女性、尊敬といった指小形に関する普遍的な意味の領域と広がりを見せている (Nieuwenhuis 1985, 39)。Jurafsky も同様の意味を挙げ、多義的な指小形の意味を、実際の「ものの小ささ」から様々な意味を発展させる「放射状のカテゴリー (radial category)」としている (Jurafsky 1996, 535-536, 542)。よって、形式的な立場の形態論や語形成論による指小形の研究には限界があり、語用論や文脈を重視したより広いアプローチが必要である。

4.3. 指小とアスペクト

ラトヴィア語の名詞に関する文法カテゴリーには性、数、格があり、動詞に関する文法カテゴリーには時制、法、人称、態がある。異なる品詞に関係する指小とアスペクトのカテゴリーに共通するのは、どちらもラトヴィア語においては文法カテゴリーというよりも語彙・意味のカテゴリーであり、形態論ではなく語形成論で論じられることである。

4.3.1. 指小からアスペクトへ

指小からアスペクトへの議論の移行は一見すると唐突に見える。しかし類型論的には指小のカテゴリーは名詞に限らず、形容詞、副詞、数詞、人称代名詞、指示詞、疑問詞、間投詞、挨拶など一連の品詞に及び、動詞も例外ではない (Nieuwenhuis 1985, 64-73)。

Nieuwenhuis の分類によれば、接尾辞の付加された指小の動詞には3つの意味があり、①子供や愛する人に対して用いる指小の動詞のほか、②「動作の反復や、繰り返される中断」を示す動詞、③「普通よりも少ない量を示す動作やあまり重要でなく、広い意味で“小ささ”を含む動作」を示す動詞が挙げられる (Nieuwenhuis 1985, 70-73)。後者の2つの意味は紛れもなく、アスペクト論で定義される動作の反復 (iterative) や短い動作の時間限定や縮減のアスペクトである。

ラトヴィア語でも指小形は名詞に限らず、一部の形容詞 (*maziņš* : *mazs* 「小さい」、*labiņš* : *labs* 「よい」と副詞 (*lēnītēm* : *lēnām* 「ゆっくりと」、*allažņ* : *allaž* 「いつも」)、人名の愛称形 (*Guntariņš* : *Guntars*、*Ilzīte* : *Ilze*) や名詞を含む挨拶 (*Labdieniņ!* : *Labdien!* 「こんにちは!」、*Visu labiņu!* : *Visu labu!* 「ごきげんよう!」) にも見られる。

動詞に関してはどうか。Rūķe-Draviņa は指小形の動詞として、*čučiņāt* 「ねんねをする」 (: *čučet* 「ねんねをする」)、*stāviņāt* 「立っている」 (: *stāvēt* 「立っている」)、*nāciņ!* 「来

なさい!」(: nāc! 「来なさい!」2人称単数に対する命令形) などごくわずかな例を挙げているが、これらの動詞は育児語 (Ammensprache) で使われる (Rūķe-Draviņa 1959, 27)。これは Nieuwenhuis の挙げた動詞の指小形の意味の①にあたはまる。

2.5.1.の脚注 26 で触れたように、②の反復のアスペクトを示す形態素には -ā-, -ī-, -inā-, -o-, -ē- と -aļā-, -uļā-, -avā-, -alē-, -elē-, -ulē-, -uļo-, -avo- などの接頭辞があるが (Soida 2009, 192-197)、反復の接尾辞の付加は接頭辞付加ほど生産的ではない。l や j の子音を含む接尾辞については軽蔑的意味のニュアンス (pejoratīvās nozīmes nianse) があり (Soida 2009, 196-197)、この接尾辞で示される反復アスペクトに否定的なニュアンスがあるということは名詞の指小形と共通している (例: drebelēt 「震える (反復)」: drebēt 「震える」、staigulot 「歩く (反復)」: staigāt 「歩く」)。

Nieuwenhuis が挙げた指小の動詞の③の意味である「動作の小ささ」というアスペクト的意味には、接尾辞よりもはるかに生産性が高い接頭辞によって示される、動作の時間限定と縮減のアスペクトが想起される。

『標準語文法』のアクツィオンスアルトの記述の中には簡潔ではあるが、「指小の動詞 (deminutīvie verbi) と名付けられた pajokoties 「ちょっと冗談を言う」と pielabot 「ちょっと訂正する」の2つの動詞が挙げられている (『標準語文法』1959, 565)。Staltmane による、少量の動作や集中性の低い動作を動詞に与える接頭辞の説明でも、所々に「指小の意味 (deminutīvā nozīme)」という表現が見られる (Staltmane 1958d, 233-246)。

アスペクトは状況の内的時間に対する話者の評価を示す。そしてアスペクトには最も抽象的な PFV・IPFV の対立アスペクトや、動作の量や時間、局面を示す様々なアスペクトがあった。完了体・不完了体の対立アスペクトが文法カテゴリーとされるロシア語のアスペクトでさえも、動詞のアスペクトは「主観・客観的」で、「主に解釈的な」カテゴリーである (Bondarko 1976, 47-50)。指小もアスペクトも、前者は主に名詞が示す事象の小ささや評価、後者は動詞が示す事象に対する時間的な話者の評価と言う点で共通している。アスペクトの中で、ものの「小ささ」を示す指小と相関するのは、動作の“小ささ”を示す時間限定や縮減アスペクトである。

時間限定や縮減アスペクトを分析する前に、評価という観点で指小とアスペクトが交差する感情的側面と表現的側面、また指小形と縮減アスペクトの pa-動詞に対する言語文化論の批判を 4.3.2.から 4.3.4.で論じる。

4.3.2. 指小形とアスペクトの感情的側面

4.1.で紹介したアスペクトと主観的評価の関わりの指摘は、膨大な先行研究があるスラヴ諸語のアスペクト論の中では多くない (Piernikarski 1969, 1975, Karavanov 2004, Stawnicka 2005, Mustajoki & Pussinen 2008, Petrušina 2011)。

言語における感情的側面は指小形に関わらず、法や時制、人称や数といった文法形式に

より様々なレベルで現れる (Volek 1987, 17)。しかし感情という主観的な側面は客観的な文法形式の下では文法の周辺的な現象としてしか扱われない。例えばロシア語のアスペクトの研究では、たとえそれが語用論的なアプローチであったとしても、扱う現象は究極的には完了体と不完了体の対立という文法現象に帰結される。

語形成論からの観点では、アスペクトと感情性に関する間接的な指摘がある。Zemskaja は、接頭辞付加により形成された動詞は新たな指示 (denotat) を生み出したり、新たな種類の動作 (例: prilunit'sja 「月面着陸する」) を示すことがあるが、「社会的要因よりも主観的・人間的要因がより強く」、「動作に対する人間の主観的立場を反映する」とし (Zemskaja 2009, 84-85)、接頭辞と再帰の後接辞-sja によって表され、一般に好ましくない結果をもたらす動作の集中性を示す動詞を挙げている。Zemskaja はアスペクトと感情性のつながりを直接指摘していないものの、動作の集中性はアスペクト (ロシア語ではアクションスアルト) の一つであることから、Zemskaja の言う「主観的・人間的要因」や「動作に対する人間の主観的立場」の一つに動詞のアスペクトも含まれることがうかがえる。

ロシア語のアスペクト対立の意味的・形態的制限を研究した Vajda は、体の対立をなさない完了体動詞の多くを陳述的に有標な (narratively marked) 動詞としている。Vajda が定義する陳述的に有標な動詞とは、出来事の陳述と同時にその出来事に対する話者の態度を示す動詞である。これらの動詞には、陳述する出来事に対する話者の感情的態度を示す動詞 (俗語) や時間面における話者の主体的な印象を示し、陳述される出来事を時間の面で聞き手に視覚化しやすくさせる動詞などがある (Vajda 1987, 64)。

後者の動詞の例として挙げられているのが、完了体の単体動詞 tolkanut' 「押す」である。不完了体 tolkat' とペアをなす完了体 tolknut' 「押す」と比較した完了体の単体動詞 tolkanut' 「押す」には、「思わず」という意外性や「強く」という動作の強度が示されている。同様に不完了体 govorit' とペアをなす完了体 skazat' 「言う」と比較した完了体の単体動詞 skazanut' 「言う」には動作の意外性だけでなく、言うことが馬鹿げていたり場違いであるといった話者の評価が示されている (Vajda 1987, 65-66, 71-72)。これらの動詞の多くはロシア語学のアスペクト論で一回体と呼ばれる動詞を派生させる動詞接尾辞の一つである -anu- が付加されている。

また、動作の漸次的・連続的展開を示す動詞 ponaexat' 「一定量の主体が次から次へと来る」、povytolkat' 「次々に押し出す」や、動作の個別の主体や客体が接頭辞により規定される perebit' 「全員を殺す」、poprjatat' 「多数のものを隠す」といった動詞も話者による主体的な⁶⁶出来事の認識を示し、陳述的に有標であるという (Vajda 1987, 72-73)。本論文筆者が下線で示した接頭辞の付加により、和訳中に下線で記した意味要素が加わっている。

Vajda はさらに、「時間面における主体的な印象を示す動詞」(Vajda 1987, 65) として次のような動詞を挙げている。例えば dovoločit'sja 「女を追い回し、その結果悪い結果を招く」

⁶⁶ Vajda は研究の中で subjective と objective という用語を、それぞれ陳述の主体、客体に関わる、という意味で用いている (Vajda 1987, 31-33)。

(基動詞 *voločit'sja* 「女を追い回す (俗)」) のように期待していない動作結果をもたらし、話者の認識の中で原因と結果を皮肉的に示す動詞、*zaezdit'* 「乗りつぶす」(基動詞 *ezdit'*⁶⁷ 「乗る」) や *zasudit'* 「不公平な審判を下す」(基動詞 *sudit'* 「審判を下す」) といった軽蔑の意味が加わる動詞、*izolgat'sja* 「もう嘘がつけなほど嘘をつく」(基動詞 *lgat'* 「嘘をつく」) のようにこれ以上動作が行われないという話者の予想や尽力を示す動詞がある (Vajda 1987, 77-79)。Vajda が規定する陳述的に有標な動詞には、動作の意外性という話者自身が経験する驚きを示す動詞や、*dovolochit'sja* や *izolgat'sja* といった個別のアクションスアルトに分類される動詞があり、アスペクト (と一般に分類されるもの) が感情的側面と結びついていいることをうかがわせる。

ロシア語の表現的語彙を研究した語彙論の Luk'janova は、多回を示す *-yva- / -iva-* (*siživat'* 「座っている (多回体)」: *sidet'* 「座っている」) や Vajda も指摘した *-anu-* (*rezanut'* 「切る (一回体)」: *rezat'* 「切る」) を指小辞と並べて「主観的評価の接尾辞」として挙げている (Luk'janova 1986, 30)。Luk'janova の先行研究には次の 4.3.3. で再度立ち返る。

ラトヴィア語学のアスペクト論では、接辞付加された動詞が持つ感情性についての直接の言及はあまりなされていない⁶⁸。しかし、上で引用したロシア語学のアスペクト論における感情性の言及はラトヴィア語にも当てはまる。例えば接頭辞と再帰要素との組み合わせにより示される高い集中性 (動作時間が長い、動作量が多い) を示す動詞は、動作の末に動作主体が経験する何らかの結果 (多くは否定的結果) とその評価を含意している。

『標準語辞典』では、再帰要素との組み合わせにより動作の高い集中性を示す接頭辞動詞の辞書記述として、「長い時間」「時間全体」「たくさん」といった副詞によるアスペクト的意味の説明が基動詞になされると同時に、「疲れるまで」といった動作の結果がカッコで説明される (『標準語辞典』)。例文 4-10 から例文 4-16 の下線部の動詞の基動詞は *strādāt* 「働く」、*skriet* 「走る」、*lasīt* 「読む」、*staigāt* 「歩く」である。

接頭辞 *no-* + 再帰要素 「過労 (大抵、疲れるまで)」

例文 4-10 (NRA. 23.05.2006)

Ne velti tautā ir teiciens: tā nostrādājos, ka negribas ēst.
否 無駄に 民衆-位 be-現3 表現 それほど 働いて疲れる-過1単 従 否-したい気分だ-現3 食べる
こういう表現には理由があるものだ: “たくさん働いて疲れたので、食べる気分ではない”。

例文 4-11 (D. 26.01.2002)

Šodien noskrējos visu dienu un esmu laimīga, ka rīt nekur nav jābūt.
今日 走って疲れる-過1単 すべて 日 そして be-現1単 幸せな 従 明日 どこにも 否-be-現3 be-義
今日は一日中走って疲れたが、明日どこにも行く必要がないのでよかった。

⁶⁷ 接頭辞付加により動詞と補語の統語関係が変わる (例: *ezdit' na lošadi* 「馬に乗る」、*zaezdit' lošad'* 「馬を乗りつぶす」)。

⁶⁸ 表現性については、次節で説明するように Staltmane が指摘をしている (Staltmane 1958d)。

接頭辞 pār- +再帰要素 「過剰 (疲れや病気)」

例文 4-12 (D. 09.04.2011)

Tas bija milzīgs stress, finālā pārstrādājos, un sabojāju veselību.
 それ be-過3 巨大な ストレス 最後-位 働きすぎる-過1単 そして壊す-過1単 健康-対
 それは大きなストレスで、結局私は働きすぎてしまい、体を壊した。

例文 4-13 (VZŽ. 27.07.2007)

Bērībā es gan ļoti daudz lasīju. Droši vien pārslasījos, tāpēc tagad tā mazāk...
 子供時代-位 私 助 とてもたくさん 読む-過1単 おそらく 読みすぎる-過1単 だから 今 助 少なく-比
 子供時代私はたくさん読書をしていた。たぶん読書をしすぎたので、今は「読書量が」減った。

接頭辞 sa- +再帰要素 「集中 (その結果何らかの身体的状態になる)」

例文 4-14 (LA. 12.07.2004)

Ja vairāk sastaigājās, redzēju, kā mīļās sejas vaibstos ielija sagurums.
 もし さらに 歩き通す-過3 見る-過1単 いかにかわいい 顔-属 表情-複位 浮き出る-過3 ちょっとした疲れ
 さらに「彼女が」歩き通すと、かわいい顔の表情にかすかな疲労が浮き出てきたのが見えた。

接頭辞 iz- +再帰要素 「満足」

例文 4-15 (KL. 13.04.2011)

Ir tā, ka reizēm slikts garastāvoklis, (..) bet jābrauc uz kori. Es aizbraucu,
 be-現3 このように 従 時に 悪い 気分 しかし行く-義へ 合唱団 私 出かける-過1単
 izstrādājos, un man ir pavisam cits garastāvoklis!
 思う存分歩く-現1単 そして 私-与 be-現3 まったく 他の 気分
 時々気分が良くない時もあるけど、合唱団には行かなければいけない。私が出掛け、しっかり働く。する
 とまったく違う気分になる！

例文 4-16 (KL. 07.12.2009)

Kad ir sniegs, izroku ceļņus, un ir vismaz kāda enerģija. (..)
 時 be-現3 雪 掘る-現1単 道-複対-指 そして be-現3 少なくとも 何らかの エネルギー
 Izstaigājos, un uzreiz cita enerģija.
 思う存分歩く-現1単 そして すぐに 他の エネルギー
 雪があると道 (指小形) を掘る。すると何かしらのエネルギーが出てくる。しっかり歩くと、すぐに違う
 エネルギーが出てくる。

これらの接頭辞動詞は強度のある動作や集中性が高い動作に加え、肯定的・否定的な結果や評価を含んでいることから、話者の主観的評価が認められる。

4.3.3. 指小とアスペクトの表現的側面

0.2.1.3.で述べたように、感情的側面と表現的側面は密接に結びついている。話者の個人的、主観的な態度といった感情的側面を持つ指小辞は表現性を持ち、したがって指小形は表現的側面も持つ。

アスペクト論の先行研究では、アスペクトと感情的側面との関わりよりもアスペクトと表現的側面との関わりを示す指摘の方が多い。

Volek がロシア語のアスペクト対立における表現性の例として挙げる不完了体の動詞による動作の否定の強調では、体が文法化されていることが表現性を消している (Volek 1987, 17) と述べるように、表現性は文法的形式で示されることにより薄められると考えられる。

一方で、ロシア語の中でも完了体と不完了体という文法的対立の下にまとめ上げられるアクツィオンスアルトに目を向けると、先に挙げた *po*-動詞のように、何らかの主観的態度を示し表現的語彙とされる接頭辞動詞も数多くある。

Luk'janova は表現性を持つ語彙の意味要素の一つを「語が示す現象の質・量的な特徴づけ、つまり現象の程度」を示す高・低の「集中性」としている (Luk'janova 1986, 55)。「現象の実際の程度ではなく、主体による現象の程度についてのイメージ (*predstavlenie*) を反映する」(Luk'janova 1986, 57) と Luk'janova が定義する表現的な語彙は、主体が中心となって現象を捉えるという点において、Vajda の述べた「陳述的に有標な」動詞の定義と重なる。

4.3.2.で引用したように、Luk'janova は一回体や多回体の接辞を指小辞と共に表現的接尾辞としている。しかし動詞接頭辞については、動作の程度を示すとしながらも、結果性や開始性といった文法的意味の陰で表現性が薄れているとし、表現的接頭辞については論じていない (Luk'janova 1986, 90)。

スラヴ諸語のアスペクト論における研究では、体の対立を持たないアクツィオンスアルトの完了体の動詞が持つ文体的な特徴が指摘されている。

Zemskaja は、ロシア語のアクツィオンスアルトに分類される単体の接頭辞動詞の大部分に表現性を見出し、主に口語や口語に近い文学作品に多く見られるとしている (Zemskaja 1955)。

Russell によるロシア語の動詞接頭辞 *na*-による動作の量化 (*quantification*) に関する研究では、*na*-動詞 557 のうち 57% が文体的に有標であり、さらにそのうちの 50% が口語的、40% が俗語的、8% が廃語、2% が方言的であるとしている。またその判定を行ったのが教養のある母語話者であったため、語の許容度が低くなってしまふことを指摘している。文体的に有標な *na*-動詞の具体例として *nadelat'* 「しまくる」(基動詞 *delat'* 「する」) や *nastradat'sja* 「たくさん苦しむ」(基動詞 *stradat'* 「苦しむ」) を挙げている (Russell 1986, 8-10, 79-80)。

文体的に制限がある点では、瞬間性や一回性、終了性といったアスペクト的意味を持ち、口語や俗語で多く用いられるチェコ語の接尾辞 *-nou*- も挙げられる (Lebed' 1983, 131, Svobodová 2007, 72)。

ラトヴィア語では、Staltmane が接頭辞による個別のアスペクトの表現性について言及し

ている。4.3.2.で挙げた動作の実現の度合いや集中性が高い一連の接頭辞動詞は、表現的ニュアンスを持ち、口語や俗語で多く見られる (Staltmane 1958d, 254, 259)。また PFV 化を行う接頭辞 *no-*も視覚や聴覚に関する動詞に付加されると、短時間性と同時に表現性や力強さ (*energiskums*) を示す (Staltmane 1958d, 230)。このようにアスペクトの意味を持つ語の一部は、指小形と同様に表現的語彙と見なせる。

接頭辞が持つ意味に加え、一音節の形態素というコンパクトな接頭辞の形式的側面も接頭辞の表現的側面を高める効果があると考えられる。メタ言語の辞書記述のように、表現的とされる接頭辞動詞を基動詞で置き換え、意味的には接頭辞の意味を副詞や副詞句、その他の表現で代わりに示すことはできても、メタ言語による説明は冗長になり接頭辞の持つ形式的なコンパクトさと表現性は失われる。例えば 4.3.2.で見た一連の接頭辞動詞を、辞書記述に置き換えた場合の表現性は、感情性と同時に薄まるだろう。

ラトヴィア語のアクセントは、固定アクセントで語の一音節目に置かれる。否定辞 *ne-*や義務法で使われる接頭辞 *ja-*が付加される場合以外は、接頭辞にアクセントが置かれるため、接頭辞が音韻的に聴覚印象に残ることも表現的側面を助長しているといえるかもしれない。

4.3.4. 言語文化論に見る縮減アスペクトと指小形

主観的評価の表出が感情的・表現的側面を持つがゆえに、指小形と縮減アスペクトの動詞は使用に制限があり、言語文化論で批判されることがある。

4.3.4.1. 言語文化論に見る指小形

指小形の形態的側面に関する言語文化論の批判には、名詞の曲用タイプに応じて決まっているはずの指小形の形成方法の逸脱がある。例えば *zvaigzne* 「星」は曲用タイプでは指小辞 *-īt-*の付加により指小形は *zvaigznīte* であるが、別の曲用タイプの名詞に付加される指小辞 *-īq-*の付加によりできた *zvaigzniņa* が批判される (Freimane 1993, 156)。

しかし言語文化論で最も多い指摘は、指小形の多用である。指小形の多用により、指小形が示す主観的評価が薄れることが批判される (Baltīņa 1977, Freimane 1993, 188, Paegle & Kušķis 2002, 51-52)。指小形が「ことばをより生き生きしたものとするのに役立つ」(Baltīņa 1977, 67) と言われるように、指小形が表現性を持っていることは広く認められる事実である。しかし身近なものを示す名詞の指小形 (*pieniņš* 「牛乳」や *rociņa* 「手」) や人への呼びかけ (*kasierīt!* 「レジの人!」や *šoferīt!* 「運転手さん!」) が、言語活動の中で多用されることで、「指小の接尾辞が脱意味化」するとされる (Freimane 1993, 188)。

Freimane は「不要な指小形の多用」として *dzīvībiņa* 「命」、*maziņš* 「小さい」、*bērniņš* 「子供」といった指小形を含む新聞記事からの例文 4-17 を批判している (Freimane 1993, 188)。

例文 4-17 (Freimane 1993, 188)

(..) 6. decembrī ugunsnelaime izdzēsa dzīvībiņas diviem maziņiem bērniņiem.

12月-位 火事 消す-過3 命-複対-指 2 小さい 子供-複与

12月6日、火事は2人の小さな(指小形)子供たちの(指小形)命を(指小形)消してしまった。

Freimane の評価は、指小形がふさわしくない言語使用の場面と指小形の多用によるものと考えられる。しかし指小形の持つ主観的側面からこの例文 4-17 を解釈した場合、火事で亡くなった子供たちへの書き手の哀れみが各指小形によって示されていると考えられる。

父親が目を離している間に失踪した1歳半の男児の衣類について、警察が発表した情報が新聞に掲載された。例文 4-18 では、男児の衣類が6つの指小形で示されている。

例文 4-18 (D. 15.5.2004)

Ģērbies : tumši zilā vējjakā, zaļā kombinezonā ar lentītēm uz
着込む-能過 濃く 青い ウィンドブレイカー位 緑の チョッキ位 のついた リボン-複-指 上に
pleciem, baltā apakškreklā, rozā kreklā, zilā jaciņā, kājās zilas kurpītes
背中-複 白い 下着のシャツ位 ピンクの シャツ位 青い ジャンパー-指 足-複位 青い 靴-複-指
ar sprādzīti, galvā balta sasienama cepurīte ar bumbulīti.
のついた バックル-指 頭-位 白い 結ぶ-受過 帽子-指 のついた ボンボン-指

服装：濃い青のウィンドブレイカー、背中にリボン(指小形)のついた緑のチョッキ、白い下着のシャツ、
ピンクのシャツ、緑のジャンパー(指小形)、足にはバックル(指小形)付きの青い靴(指小形)、頭にはボンボン(指小形)がついた白いあご紐つきの帽子(指小形)。

この事件は、父親が男児から目を離して酒を飲んでいて男児が池で溺死したことから、国内で話題となった。同新聞のエッセイでは二日後に遺体で発見された男児に対して哀悼の意が示されている。例文 4-18 の衣類の情報で用いられた一連の名詞の指小形の使用の印象が強いのか、このエッセイのタイトルは『バックル(指小形)付きの靴(指小形)(Kurpītes ar sprādzīti)』で、指小形の使用が言及されている(例文 4-19)。

例文 4-19 (D. 31.05.2004)

No meklēšanas paziņojuma: "Kājās zilas kurpītes ar sprādzīti, galvā balta sasienama
から 捜索-属 発表 足-複位 青い 靴-複 と バックル-指 頭-位 白い 結ぶ-受過
cepurīte ar bumbulīti. "Pat oficiālā informācijā tika lietoti deminutīvi. Tāpat
帽子-指 と ボンボン-指 さえ 公式な 情報-位 受-過3 使う-受過 指小形-複 同様に
kā tad, kad ugunsdzēsēji pēc dažām dienām izsūknēja dīķi un tika
のように その時 時 消防士-複 後で 数 日-複 捜索する-過3 沼-対 そして 受-過3
ziņots, ka atrasts "puisīša līķis". Mazam cilvēciņam nebija ļauts
知らせる-受過 従 見つける-受過 男子-属-指 死体 小さい 人間-与-指 否-be-過3 許す-受過
izaugt lielam.
育つ 大きく

捜索の発表より。「足にはバックル(指小形)付きの青い靴(指小形)、頭にはボンボン(指小形)付きの白い帽子(指小形)」。公式な情報でさえ、指小形が用いられていた。数日後消防士達が沼を捜索し、「男の子(指小形)の遺体」が発見されると通知した時まだ。この小さな人(指小形)には大きくなるのが許されなかったのだ。

ある場所を出所とする情報は記者の意図でそのまま新聞記事に掲載されることもあれば、記者の意図や第三者の校閲により語や語形、表現が修正されることもある。男児の失踪後、5つの全国紙で捜索の手がかりとなる男児の衣服の情報が掲載されたが、記事によっては指小形ではない名詞が用いられている。以下の表 4-2 では、記事中の各名詞を比較し、指小形を網掛けで記す。各記事の文中では格変化をしている名詞もあるが、表では主格で示す。

表 4-2：各新聞記事に見る男児の服装に対する指小形の使用

	BNS. 14.05.2004	D. 15.05.2004	LA. 15.05.2004	VA. 15.05.2004	NRA. 15.05.2004
ジャンパー	jaciņa	jaciņa	jaciņa	- ⁶⁹	-
リボン	lentītes	lentītes	lentītes	lentes ⁷⁰	lentes
靴	kurpītes	kurpītes	kurpītes	kurpes	kurpes
バックル	sprādze	sprādzīte	sprādzīte	sprādze	sprādze
帽子	cepurīte	cepurīte	cepurīte	cepurīte	cepurīte
飾り玉	bumbulītis	bumbulītis	bumbulītis	bumbulis	bumbulis

男児の遺体発見後の記事でも、「男の子の遺体」に指小形の使用のばらつきが観察できる(表 4-3)。表 4-3 では「男の子」は属格で、「遺体」は主格で示す。puisītis (属格 puisīša) と puisēns (属格 puisēna) は puisis 「男の子」の指小形である。NRA.の記事では zēns (属格 zēna) 「少年」の使用もあった。

表 4-3：各新聞の記事に見る男児の遺体に対する指小形の使用

	BNS. 17.05.2004	VA. 17.05.2004	D. 17.05.2004	NRA. 17.05.2004	LA. 18.05.2004
男の子の	puisīša	puisīša	-	zēna puisēna	puisēna
遺体	līķis	līķis	-	līķis	līķītis

警察による実際の発表でどの名詞が指小形で用いられていたのかを知るためには、警察による発表を確かめるしかないだろう。しかし校閲により消える接頭辞 no-のように(本論文 3.5.3.を参照)、出典元の情報やある人物の発言を記事に掲載する段階で、書き手や校閲者により語形や表現の変化が行われたことは明らかである。

情報伝達の点では、衣服を指小形にするかしないかは捜査の手がかりとなる衣服の情報を歪曲するわけでも、捜査の支障になるわけでもない。指小形は命題的な文の意味も、実際に指す対象も変えることはないからである。

⁶⁹ 記事中では省略されている場合にはハイフンを記した。

⁷⁰ 記事には lences 「レンズ」とあったが、明らかな誤植である。

しかし1歳半の男児が着る客観的に小さい子供服であったとしても、VA.とNRA.の新聞記事では名詞を指小形で示すには何らかの抵抗があったと思われる。この抵抗には、指小形が実際の小ささを示す以上に何らかの主観的評価を表出すること、そして主観的評価の表出が客観的な情報の伝達の場面にふさわしくないことが確認される。男児の衣服を巡るこれらの例は、指小形の使用ではものの小ささを示す客観的な側面よりも、話者の態度といった主観的な側面が優勢になりうることを物語っている。

だからこそ、男児の遺体発見後の2004年5月31日付のD.紙の記事(例文4-19)における、捜査の情報に連続して用いられる指小形への反響には、警察の発表した情報という、期待されていない言語の使用場面で指小形が用いられたこと、しかも連続して用いられたこと、その指小形がそのまま新聞に載せられたことへの驚きが見て取れる。さらには、指小形をそのまま掲載することで、幼くして死んだ男児や彼の衣類を印象に残し、事件の悲しさを社会に伝える記者の意図もうかがえる。たとえ警察が指小形を用いず、記者が個人の判断でもとの名詞を指小形に修正したとしても、それは結局のところ男児や事件への記者による主観的な態度の表れであり、読者の注意を喚起するための手段⁷¹となったであろう。

4.3.4.2. 言語文化論に見る縮減アスペクト

言語文化論における縮減アスペクトは、本論文の3.5.2.で扱った借用語の動詞へのPFV化ほどには批判されておらず、RiekstiņaとFreimaneが簡単に述べているだけである。

Riekstiņaは、悪いこと(*zēns pastrādājis nedarbus*「少年はいたずらをはたらいた」)や時間限定(*pastrādājis stundas trīs, viņš meta mieru*「3時間ほど働いて、彼は落ち着いた」)の意味以外で用いられ、継続する動作や集中的な動作を示す際にpa-動詞を用いるのは正しくないとしている(Riekstiņa 1974, 25-26)。

Freimaneは縮減アスペクトについて、「不完全で短時間の動作を示す接頭辞pa-とpie-は、動詞に不真面目な態度のニュアンスを与えることから、それ(本論文筆者注:不完全で短時間の動作を指すこと)がふさわしくない場合は余剰である」とし、*paraksturot stāvokli*「状況の特徴づける」、*paturpināt sarunu*「会話を続ける」、*piepalīdzēt darbā*「仕事を助ける」を例として挙げている(Freimane 1993, 158)。

動詞(正確には動詞が示す動作)に不真面目な態度のニュアンスを与えるというFreimaneの指摘は、不完全で短時間の動作を示す縮減アスペクトが何らかのニュアンスを示し、それが主観的評価と関係していること、そして指小と縮減アスペクトに類似点があることを示唆する。

⁷¹ 『新聞図書館』で *deminutīvi* 「指小形」と検索すると、その大部分は新聞記者や発言者による指小形そのものの言及である。例えばメディアに登場する人物による指小形の多用の批判や特定の作家に特徴的な多用、指小形をよく使う人のイメージや言葉遣い(地方出身者、女性、子供)、意図的な使用(女性らしさや子供らしさを出したい、親しみや言葉の温かさを演出したい)が指摘される。これらの言及からは、指小形が単にものの小ささを示すのではなく、なんらかのイメージを広い範囲の言語使用者に喚起させるほどの存在であることがわかる。

場面にふさわしい言語使用を目指す言語文化論で、指小形と縮減アスペクトが共に批判されている事実は、後者の縮減アスペクトにも主観的評価の表出がありうることを裏付けるものである。

4.4. 接頭辞 pa-

動作の“小ささ”、つまり継続時間が短い動作、低い集中性の動作を示す接頭辞は複数ある。Soida は「動作の部分的実現を特徴付ける」接頭辞として aiz-, ap-, at-, ie-, no-, pa-, pie-, uz- を挙げているが、その中でも pa- を最も生産的な接頭辞としている (Soida 2009, 246-250)。

本節では、接頭辞 pa- の空間的意味とアスペクト的意味を概略する。

4.4.1. 接頭辞 pa- と基動詞の語彙的関連性

接頭辞 pa- の空間的意味は「下」「沿」「過」であり、対応の IPFV 構文を作る際に接頭辞の空間的意味に対応するのは、前置詞 zem 「...の下に」や副詞 apakšā 「下に」、前置詞 gar 「...に沿って」と garām 「過ぎて」である。

空間的意味は pabraukt zem tilta 「橋の下へ乗り物で行く」(基動詞 braukt 「乗り物で行く」) や palaist garām 「逃す」(基動詞 laist 「放す、英語の let に相当」) といった移動を示す動詞に付加される際に発揮される。

アスペクト的意味についてはどうだろうか。まず形式的意味の接頭辞として用いられるのは、基動詞 rādīt 「見せる」や darīt 「(A を B に) する」、ņemt 「取る」、ziņot 「報告する」、sacīt 「言う」、teikt 「言う」などに対する pa- 動詞の場合である。接頭辞 pa- は空間的意味の抽象化が他の接頭辞よりも進んでいるが、形式的意味の接頭辞としての生産性は高くなく、短時間の動作や縮減の動作を示す (Staltmane 1958d, 79-80)。

Soida は完全な動作を示す接頭辞 pa- の意味を挙げているが (Soida 2009, 252)、基動詞が「栄養」という語彙的意味にまとめられることは指摘していない。例えば pabarot 「しっかり栄養を与える」、paēst 「しっかり食べる」や padzert 「しっかり飲む」、またその使役動詞 paēdināt 「しっかり食べさせる」や padzirdināt 「しっかり飲ませる」の場合、接頭辞 pa- は完全に、満足に行われる動作を示す。この意味の接頭辞 pa- には、基動詞との語彙的関連性がある。

『標準語辞典』では、pa- 動詞が varēt 「できる (広く可能)」や spēt 「できる (能力)」といったモーダル的な動詞と結びつき、「主体の能力」を表すとされている。例として varēt paiet 「歩ける」(基動詞 iet 「行く」)、spēt palasīt 「読める」が挙げられている(『標準語辞典』)。しかし「主体の能力」という語彙的意味がモーダル的な語と共に用いられて初めて確認される意味なのか、それとも接頭辞 pa- 自体が動詞に与える意味なのかを判断することは難しい。よって pa- 動詞とモーダル的な動詞との結びつきは本章では特に扱わない。

接頭辞 *pa-*は空間的意味を失いやすく、広い語彙的意味の基動詞と結びつき、「短く、弱まった集中性の、小さな結果の動作」や、「短く、短時間で行われる動作」という意味を与える(『標準語辞典』)。これはそれぞれ 4.4.2. で見る時間限定のAspectや 4.4.3 で見る縮減Aspectに対応する。どちらも動作をプロセスとして示すことができず、動作の時間に限定を加えている点で PFV のAspectである。

4.4.2. 時間限定のAspect

接頭辞 *pa-*は、動作の短い継続時間を表す時間限定のAspectを示す。動作の継続時間は対格補語で表示される。動作の継続時間を時間対格で示す点で接頭辞 *no-*と共通しているが、接頭辞 *no-*は一定の、もしくは長い継続時間を示す。

例文 4-20 では、アスベストを吸い込む危険がある屋根の上を1年間歩いても、5分間の受動禁煙や5秒間の政治論議と同じ程度の健康被害にしかならない、と冗談交じりに述べられている。ここでは基動詞 *staigāt*「歩く」も、*pa-*動詞の *pastāvēt*「立っている」と *padiskutēt*「議論する」も共に時間対格を取っている。しかし同じ程度の健康被害でも「1年間」と比較した「5分間」や「5秒間」といったより短い時間幅で行われる動作が *pa-*動詞で示されている。

例文 4-20 (PL. 17.09.2011)

Gadu staigājot gar šādu jumtu, kaitējums acīmredzot ir tikpat liels, kā
 年-対 歩く-副 沿って このような 屋根 害 おそらく be-現3 同じ程度 大きい ように
piecas minūtes pastāvot smēķētāju sabiedrībā vai piecas sekundes padiskutējot
 5 分-複対 PA-立っている-複 喫煙者-複属 集まり-位 または 5 秒-複対 PA-議論する-副
 par politiku.
 ついて 政治

[アスベストの多い] このような屋根を1年間歩くことによる害は、5分間喫煙者の中に立っていたり、5秒間政治について議論をすることとおそらく同じ程度である。

継続時間の短い動作を示す *pa-*動詞は、継続時間の長い動作を示す *no-*動詞と対をなしている。基動詞 *dzīvot*「生きる、住む」と *strādāt*「働く」の *pa-*動詞と *no-*動詞を比較してみよう。名詞 *viena diena*「一日」や *mūžs*「人生、生涯」などの時間を示す名詞(句)は、それぞれ *pa-*動詞と *no-*動詞に結びつきやすい。一方でどちらの接頭辞動詞とも結びつくことができる時間対格もある。この場合どちらの接頭辞動詞を用いるかは、話者が継続時間を短いと感じるか、長いと感じるかという主観的な判断である。*pusgadu*「半年間」という時間対格は例文 4-21 では *pa-*動詞、例文 4-22 では *no-*動詞と共に用いられている。

例文 4-21 (D. 21.04.2011)

Pusgadu padzīvoju, pastrādāju un padomāju Amerikā.
 半年 PA-住む-過1単 PA-働く-過1単 そして PA-考える-過1単 アメリカ-位

半年アメリカに住み、働き、考えた。

例文 4-22 (NRA. 15.01.2010)

Kādu pusgadu tur nodzīvojuši un nostrādājuši, jutos kā citā vilnī(..).
 大体 半年 そこで NO-住む-能過 そして NO-働く-能過 感じる-過1単 のように 他の 波-位
 半年くらいそこに住んで働くと、違う生活をしているようなリズムだった。

pa-動詞も no-動詞も pusgadu 「半年間」という時間対格を要求する点で、制限時間的な時間幅を示す時間位格を要求する他の PFV の動詞と異なる。しかし形態的特徴として接頭辞があること、また意味的特徴として IPFV の動作の継続時間を制限していることから PFV の動詞である。例文 4-23 のように IPFV の基動詞を用い、動作に短いか長いかの判断や区切りをそもそも示さないこともある。

例文 4-23 (NRA. 17.03.2007)

Kad braucu prom uz Parīzi – pusgadu tur strādāju un dzīvoju – bija
 時 行く-過1単 離れてへパリ 半年 そこで 働く-過1単 そして 住む-過1単 be-過3
 ļoti grūti.
 とても つらい

パリへ去る時、私はそこに半年間働き、暮らしていたので、とてもつらかった。

接頭辞 pa-が付加され時間限定のAspectを示す動詞には状態や活動を示す基動詞が多い。dzīvot 以外にも strādāt 「働く」、sēdēt 「座っている」、stāvēt 「立っている」、lasīt 「読書をする」、runāt 「話す」、dziedāt 「歌う」、dejot 「踊る」、mācīties 「勉強をする」、studēt 「勉強をする」、klausīties 「聞く」などがあり、借用語の動詞では veģētēt 「無為に過ごす」、eksistēt 「存在する」、pauzēt 「休みを取る」といった基動詞から派生した pa-動詞がある。

4.4.3. 縮減Aspect

客観的な時間幅の中で行われる動作を示す時間限定のAspectに対し、縮減Aspectはより曖昧である。縮減Aspectは「少し、ちょっと」という動作量の少なさ、動作の集中性の低さを示す。

共起する副詞には、以下のような動作の低い集中性や量を示す副詞（すべて「少し、ちょっと」という意味）がある。-iņ-や-it-といった指小辞の付いた副詞もある。

mazliet, mazlietiņ, nedaudz, bišķi, bišķiņ, mazbišķi, mazbišķīt, drusku, drusciņ, mazdrusciņ

例文 4-24 (LK. 01.08.2000)

Drusciņ pagatavojos kārtējai sacīkstei, un viss, ja neskaita
 少し PA-準備をする-過1単 恒例の 試合-与 そして すべて もし 否-数える-現3

aerobikas nodarbības.
エアロビクス-属 レッスン-複対

いつもの試合に向けて私は少し練習をしただけだ、エアロビクスのレッスンを除けば。

例文 4-25 の基動詞 retušēt「修整する」の pa-動詞は副詞を伴っていないが、その pa-動詞が占めす内容（コロンより後）は副詞 mazliet「少し」と mazbišķīt「ちょっと」を伴う他の動詞 mīkstināt「やわらかくする」と noņemt「取り除く」で説明されている。

例文 4-25 (D. 28.10.2006)

Es paretušēju viņu fotogrāfijas : mazliet mīkstināju sejas vaibstus,
私 PA-修正する-過1単 彼ら-属 写真-複対 少し 柔らかくする-過1単 顔-属 表情-複対
mazbišķīt noņēmu platās nāsis (..).
ちょっと 取り除く-過1単 広い 鼻孔-複対

私は彼らの写真を少し修整した。顔の表情を少しやわらかくし、広い鼻孔をちょっと取り除いた。

寝つきの悪い子供への対応策が挙げられている以下の例文 4-26 では、物理的動作を示す基動詞 masēt「揉む」と turēt「握る」の pa-動詞が用いられている。この2つの動詞は、力が入っていない、子供に対して行う動作を示している。子供の身体部位の mugura「背中」と roka「手」はそれぞれ指小形で示されている。動詞 palikt「いる、のこる」は基動詞 likt「置く」と大幅に意味が異なり、接頭辞 pa-は語彙化している。

例文 4-26 (ZL. 12.06.2010)

Pirms aizmigšanas centāties ilgāk palikt ar dēlu, pamasēt muguriņu, paturēt rociņu.
前に 就寝 努力する-過1複 長く-比 いる と 息子 PA-揉む 背中-対-指 PA-握る 手-対-指
就寝前に息子と長くいるようにし、背中（指小形）を揉んであげたり、手（指小形）を握ってあげるようにした。

似た文脈の例文 4-27 は例文 4-26 の pa-動詞に加えて基動詞 lasīt「読む」の pa-動詞が用いられている。例文 4-26 と同様に、子供の身体部位は指小形で示されている。

例文 4-27 (AZ. 05.07.2010)

(..) pirms miedziņa, palasot pasaciņu, paturot rociņu vai pamasējot muguriņu,
前に 眠り-指 PA-読む-副 おとぎ話-対-指 PA-握る-副 手-対-指 または PA-揉む-副 背中-対-指
noteikti būs lielāks ieguvums nekā pusstundu klausīties, kā bērns (..) niķojas (..).
必ず be-未 大きい-比 獲得物 よりも 30分 聞く いかにか 子供 愚図る-現3
眠りにつく前におとぎ話（指小形）を読んであげたり、手（指小形）を握ってあげたり、背中（指小形）を揉んであげたりすることで、子供が愚図るのを30分聞いているよりも、必ず大きな収穫になる。

ロシア人が多く住む地区では、1月1日の新年よりもロシア正教の旧暦の新年をより盛大に祝う。例文 4-28 では、新暦の新年のお祝いの花火や爆竹が大規模に行われなことが、副詞 mazdrusiņ「ちょっと」を伴った3つの pa-動詞で示されている。

例文 4-28 (NRA. 06.01.2012)

(..) Purvciema, Zolitūdes un Pļavnieku pamatiedzīvotāji vēl nemaz nebija kārtīgi
 Purvciems-属 Zolitūde-属 そして Pļavnieki-属 主な住民-複 まだ 少しも 否-be-過3 十分に
 uzsākuši savu veco Ziemassvētku un vecā Jaunā gada svinības, tikai mazdrusciņ
 始める-能過 自分の 旧 クリスマス-複属 そして 旧 新しい 年-属 お祝い-複対 ただ ちょっと
pabliķšķinot, pasalutējot un papetardējot 31. decembrī (..).
 PA-パンパン音をたてる-副 PA-花火をあげる-副 そして PA-爆竹をあげる-副 12月-位
 Purvciems, Zolitūde, Pļavniekiの主な住民は、12月31日にほんのちょっとだけパンパンと花火や爆竹をあ
げて、まだ少しも自分たちの旧暦のクリスマスと新年のお祝いをちゃんと始めていなかった。

例文 4-29 では、オルガン演奏を本業とする音楽家が様々な活動（指揮、歌唱、演奏）に
 少しずつ関与していることが3つのpa-動詞で示されている。

例文 4-29 (ZZ. 23.09.2010)

Es nemaz nevarētu nemitīgi spēlēt tikai Bahu. Vispār man dzīvē sanācis
 私 少しも 否-できる-願 絶えず 演奏する だけ バッハ-対 概して 私-与 人生-位 である-能過
 tā : padirīģēju, padziedu, paspēlēju ērģeles.
 このように PA-指揮する-現1単 PA-歌う-現1単 PA-演奏する-現1単 オルガン-複対
 私はバッハだけをずっと弾くなんてできない。そもそも僕の人生はこうなっているのだ。指揮も歌もオル
ガン演奏も少しずつしている。

余暇の過ごし方を述べた例文 4-30 の最初の二つの pa-動詞 palasīt「読書をする」と
 paklausīties「聞く」は習慣を表す現在時制の動詞で、少し読書をする、少し音楽を聞く
 ことが示されている。最後の pa-動詞 pabraukt「乗り物で行く」は副詞 nedaudz「少し」を伴
 い、短い運転距離（時間）の範囲に自分がくつろげる庭があることが示されている。縮減
 アスペクトの pa-動詞を用いることで、話者は Piernikarski のいう主体の話者の関与の度合い
 を示している（本論文 4.1.を参照）。この関与に何らかの肯定的な評価または否定的な評価
 があるのかは、4.6.で詳しく考察する。

例文 4-30 (AU. 29.05.2010)

„Nemeklēju kompāniju, drīzāk cenšos, lai mani nepazīst, mierīgi
 否-探す-現1単 仲間-対 むしろ 努力する-現1単 ために 私-対 否-気づく-現3 落ち着いて
palasu, paklausos mūziku.” Nedaudz pabraucot uz Ainažu pusi, viņai
 PA-読む-現1単 PA-聞く-現1単 音楽-対 少し PA-運転する-副へ Ainaži-属 方面 彼女-与
 ir arī dārziņš, kur atpūsties pēc saspringtas dienas darbā.
 be-現3 も 庭-指 閑代 休む 後で 緊迫した 日-属 仕事-位
 「[余暇の際は] 一緒に過ごす人を探すというよりも、誰にも見つからないようにしているわ。静かに読書
をしたり、音楽を聞いたりするの。」Ainažiの方へすこしドライブに行くと、彼女には仕事で張り詰めた一
 日の後で休める庭（指小形）もある。

縮減アスペクトの pa-動詞は「時々」を意味する副詞句とも結びつくことが多いが、これが縮減アスペクトに内在し得る意味であるのかは疑問が残る。例文 4-31 では基動詞に対して用いられている過去時制の pa-動詞、同記事からの例文 4-32 では、文脈から現在時制と解釈される pa-動詞も「時々」を意味する副詞と共に用いられている。

例文 4-31 (NRA. 27.01.2009)

Pirms tam trenēju Aināra vecāko meitu Elīnu (..). Arī Aināru
前に その トレーニングする-過 1 単 Ainārs-属 年上の 娘-対 Elīna-対 も Ainārs-対
šad tad patrenēju.

時々 PA-トレーニングする-過 1 単

その前私は Ainārs の長女 Elīna を指導していた。Ainārs も時々指導していた。

例文 4-32 (NRA. 27.01.2009)

Ik pa brīdim kādu patrenēju, taču bērnu un jauniešu grupu
時々 誰か-対 PA-トレーニングする-過 1 単 しかし 子供-複属 そして 若者-複属 グループ-複属

man nav.
私-与 否-be-現 3

時々誰かを指導するが、子供や若者のグループを私は持っていない。

接頭辞 pa-と結びつき、縮減アスペクトを示す基動詞は以下の表 4-4 のような語彙の意味に大きく分けられる。主に借用語の動詞を例として挙げる。

表 4-4 : pa-動詞の語彙的意味の分類

活動
padriblēt「ドリブルをする」 padreifēt「漂流する」 pafotografēt「写真を撮る」 pafilmēt「映像を撮る」 paskaipot「スカイプをする」 patvītot「ツイートする」 pakoncertēt「コンサートをする」 pamuzicēt「音楽をする」 pasportot「スポーツをする」 pasērfot「ネットサーフィンをする」 paveģetēt「無駄な時間を過ごす」 pažonglēt「曲芸をする」 pafliertēt「異性と遊ぶ」 pakoķetēt「おべっか使いをする」 など
発話
pakomandēt「命令する」 paironizēt「皮肉を言う」 padalīties「打ち明ける」 pacitēt「引用する」 painformēt「伝える」 pašantazēt「脅す」 など
思考
pateoretizēt「理論化する」 paanalizēt「分析する」 pakritizēt「批判する」 pafantazēt「空想する」 pafilozofēt「哲学する」 painterpretēt「解釈する」 pakalkulēt「試算する」 parevidēt「監査する」 pareflectēt「熟考する」 pameditēt「瞑想する」 paprognozēt「予測する」 など
視覚
pafigurēt「姿を見せる」

感情
paamizēties 「楽しむ」 panervozēt 「イライラする」 など
教授
padresēt 「調教する」 pamoralizēt 「諭す」 など
試み
paeksperimentēt 「実験する」 patestēt 「テストをする」 paprovēt 「試みる」 など
生産
pafabricēt 「生産する」 paformēt 「形成する」 など
訂正
pakoriģēt 「直す」 parediģēt 「編集する」 など
物理的動作
pamasēt 「揉む」 papresēt 「プレスする」 など
その他
paprivatizēt 「私有化する」 papopularizēt 「普及させる」 paplānot 「計画する」 pakontrolēt 「コントロールする」 pamanipulēt 「操作する」 など

同じ pa-動詞でも時間限定と縮減アスペクトを示しうる。時間限定のアスペクトの場合は例文 4-33 のように動作が継続する短い時間を示す時間対格を伴う。縮減アスペクトは例文 4-34 のように時間対格を伴わず、動作の弱い集中性を示す。

例文 4-33 (NRA. 20.05.2008)

Pusstundu pamarinēju un tad cepu.
30分 PA-マリネにする-現1 そして そして 焼く-現1

私は 30分マリネ漬けをした後に火を通す。

例文 4-34 (NRA. 20.06.2007)

Citroniņš, sāls, pipariņi, mazliet pamarinē un cep, viss.
レモン-指 塩 こしょう-複-指 少し PA-マリネにする-現3 そして 火を通す-現3 すべて

レモン (指小形)、塩、こしょう (指小形) をかけ、少しマリネ漬けにして、焼くだけ。

指小形と pa-動詞を相関させると、指小形が示す実際のものの小ささは、pa-動詞が示す時間限定のアスペクト、つまり客観的な時間の単位で示される動作の短さに相当すると言える。それに対して、縮減アスペクトは話者が動作をどのように捉えているのかに依存することが多く、時間限定よりもより曖昧で主観的な意味であると考えられる。

縮減アスペクトから生じる動作や動作の関連した事象に対する主観的評価については、4.6.で改めて詳しく考察する。

4.5. PFV としての縮減アスペクトの pa-動詞の諸特徴

接頭辞という形態的標識を持つこと、また動作の時間的な流れを限定していることから、pa-動詞はアスペクト対立を持たないものの、PFV の動詞としての特徴を持つ。本節では、縮減アスペクトの pa-動詞の主観的側面を考察する前に、順次性のタクシスの表示、基動詞と比較した pa-動詞の命令形、そして高い集中性を表す副詞との共起を通して、PFV としての縮減アスペクトの pa-動詞の諸特徴をまとめる。

4.5.1. 順次性のタクシス

pa-動詞が PFV の動詞として機能する代表的な例は、順次性のタクシスである。例文 4-35 から例文 4-37 では、pa-動詞が動詞 *atnākt* 「来る」と *aiziet* 「去る」に挟まれて用いられている。

例文 4-35 (KR. 29.07.2004)

Latviešiem ir zema pirktspēja : atnāk, papriecājas un aiziet nenopērkot.
 ラトヴィア人-複与 be-現3 低い 購買力 来る-現3 PA-喜ぶ-現3 そして 去る-現3 否-買う-副
 ラトヴィア人の購買力は低い。[店に] 来て、ちょっと喜ぶだけで、何も買わずに出て行く。

例文 4-36 (ST. 18.12.2004)

Pašlaik audzēkņi ir stabili. Maz ir tā saucamo staigātāju, kuri atnāk, pamācās un aiziet (..).
 現在 生徒-複 be-現3 安定した 少ない be-現3 そのように 呼ぶ-受現 歩く人-複 関代
 来る-現3 PA-勉強する-現3 そして 去る-現3
 今の生徒達は落ち着いている。来て、ちょっと勉強して、去るような、いわゆる遊ぶ子は少ない。

例文 4-37 (DR. 02.02.2008)

(..) no rīta vīrs aiziet, pazvejo, atnāk (..).
 から 朝 夫 去る-現3 PA-釣りをする-現3 来る-現3
 朝夫は出かけ、ちょっと釣りをし、戻ってくる。

4.5.2. 基動詞と比較した pa-動詞の命令形

PFV と IPFV のアスペクト対立は、命令形においても見られる。具体的な動作の促しには PFV の動詞が、また習慣的な動作の促しには IPFV の動詞が用いられる。このような「具体・一般」の意味対立から離れた語用論的な用法として、IPFV の動詞の命令形には相手をせかすニュアンスがある (『標準語文法』1959, 581)。

ラジオ番組において司会者がゲストに対して何かを話してほしい場合は接頭辞動詞の *pastāstīt* 「(…について) 語る」や *izstāstīt* 「(…を) 語る」の命令形が用いられることが多く、基動詞 *stāstīt* 「語る」の命令形が用いられることは珍しい。例文 4-38 では、自分の話す番で

あることがわからずに黙り込んでしまったゲストに対して、司会者が話をするように促している文脈で基動詞の命令形が用いられている。

例文 4-38 (LR. 10.12.2008)

... stāstiet, jā!
 語る-命2 複 はい
話して下さい、はい!

例文 4-39 では、思うような話の展開をしないゲストに対して、司会者が基動詞 *stāstīt* 「語る」の命令形を用いている。その後、司会者はゲストの気を損ねないように助詞 *nu* (英語の *well* に相当) を複数使用し、基動詞 *rakņāt* 「掘り下げる」の *pa*-動詞の命令形を用いた。

例文 4-39 (LR. 23.03.2010)

Nē, nē, nu stāstiet, nu galu galā kaut kāda pieredze, nu redziet, nu parakņājiet
 いや いや 助 語る-命2 複 助 結局 何か 経験 助 見る-命2 複 助 PA-掘る-命2 複
vēl kaut kur papildus.
 まだ どこか 追加で

いや、話してほしいのはですね、結局経験というか、つまりその、もう少し補足的に掘り下げてください。

PFV の動詞としての *pa*-動詞の命令形は、具体的動作の指示をする。それと同時に縮減アスペクトでもあることから、語調を和らげる機能もある。例文 4-40 では 5 つの *pa*-動詞の命令形が用いられている。注意欠陥症候群の子供の口調を真似たこの発話では、話者は憐れみを誘う口調で話している。

例文 4-40 (LR. 29.04.2010)

Psihologijā tur droši vien dēvētu par uzmanības deficīta sindromu. Nu redziet,
 心理学-位 助 おそらく 呼ぶ-願 と 注意-属 不足-属 症候群 助 見る-命2 複
 tajā brīdī, kad tu šitā izspēlējies, jā, tu patiesībā ko saki?
 その 時-位 時 君 このように フリをする-現2 単 はい 君 本当は 何-対 言う-現2 単
 „Nu pažēlo mani, nu paskaties, cik man ir slikti, atnāc parunāt
 助 PA-憐れむ-命2 単 私-対 助 PA-見る-命2 単 どれだけ 私-与 be-現3 悪い 来る-命2 単 PA-話す
 ar mani, paturi manu roku, pažēlo mani, palasi man pasaciņu
 と 私 PA-握る-命2 単 私の 手-対 PA-憐れむ-命2 単 私-対 PA-読む-命2 単 私-与 おとぎ話-対-指
 priekšā!”. Tas ir tas, ka nu, „Pievērsiet taču uzmanību!”.
 人前に それ be-現3 それ 従 助 払う-命2 複 しかし 注意-対

心理学ではおそらく注意欠陥症候群と呼ばれるものでしょ。こうやってフリをして、言うことといたら「僕を哀れんでよ、どれだけ僕がつらいか見てよ、僕とおしゃべりしに来てよ、僕の手を握ってよ、僕を哀れんでよ、お話(指小形)を聞かせてよ!」。これって「かまってよ!」ってことと同じだよ。

この他にも *pa*-動詞と基動詞の命令形には *pasakiet!* / *sakiet!* 「言ってください、教えてください」(不定形 *pasacīt* / *sacīt* 「言う」)、*padod ziņu!* / *dod ziņu!* 「連絡をください」(不定形 *padot* / *dot* 「与える」)などの相関が見られ、縮減アスペクトの *pa*-動詞の使用が語調を和らげる役

割を持っている。

このような pa-動詞の命令形による働きかけの機能は、pa-動詞の pagaidiet 「ちょっと待ってください」(基動詞 gaidīt 「待つ」)と同様の場面で用いる Acumirklīti! (元の名詞 acumirklis 「瞬間」) や Momentīņu! (元の名詞 moments 「瞬間」) のような例も含む、4.2. で論じた聞き手や読み手への働きかけという指小形の語用論的な機能と共通している。

4.5.3. 高い集中性を示す副詞との共起

縮減アスペクトを示すロシア語の po-動詞が、「強く」「かなり」「とても」といった程度の強調をする副詞と共起し得ることは、po-動詞が持つ主観的側面の研究において指摘されている (Karavanov 2004, 110-111, Mustajoki & Pussinen 2008, 262)。

ラトヴィア語でも同様の現象が確認され、loti 「とても」、pamatīgi 「徹底的に」、gana 「かなり」、daudz 「たくさん」、stipri 「強く」、ilgi 「長く」など接頭辞 pa-の持つ時間の短さや縮減のアスペクトとは反対の意味を持つ副詞が pa-動詞と結びつくことがある。

例文 4-41 (LV. 27.10.2009)

- Ko šādā situācijā darīt sociālajam dienestam?
何-対 このような 状況-位 する 社会の サービス-与
- Loti, loti padomāt, pirms šādos piedāvājumos iesaistīties.
とても とても PA-考える 前に このような 提案-複位 関与する
- このような場合に社会サービスは何をするべきでしょうか?
- こういった提案にのる前によくよく考えることです。

例文 4-42 から例文 4-44 も同様である。例文 4-42 の基動詞の strādāt 「働く」の pa-動詞は、時間限定のアスペクトとして divas nedēļas 「2 週間」という時間副詞を伴っているが、その他に副詞 pamatīgi 「徹底的に」も伴っている。例文 4-43 では kārtīgi 「十分に」の他に ilgi 「長く」という時間の長さを伴う副詞を伴っている。

例文 4-42 (LA. 03.03.2007)

- Valentīna Eiduka divas nedēļas pamatīgi pastrādāja treniņu nometnē Somijā (..).
2 週-複対 徹底的に PA-働く-過 3 練習-複属 合宿-位 フィンランド-位
- Valentīna Eiduka は 2 週間フィンランドの合宿所で徹底的に練習をした。

例文 4-43 (LA. 28.02.2007)

- Priekuļu bāzes darbiniekiem nācās ilgi un pamatīgi pastrādāt gan
Priekuļi-属 スキー場-属 職員-複与 しなければいけない過 3 長く そして 徹底的に PA-働く も
- ar rokām un kājām, gan ar galvu (..).
で 手-複 そして 足-複 も で 頭
- Priekuļi のスキー場の職員たちは手足も頭も使って長い間、徹底的に働かなければならなかった。

例文 4-44 (KR. 28.03.2006)

Tikko beigusies ziema, ko daudzi izmantoja, lai ar savu spēkratu kārtīgi
 今しがた 終わる-能過 冬 関代 多くの人 利用する-過 3 ために で 自分の 自動車 十分に
pagāzētu, paspolētu vai (..) nodemonstrētu ekstrēmu braukšanas māku.
 PA-ガスを入れる-願 PA-スリップする-願 または 見せる-願 過激な 運転-属 能力-対
 冬が終わったばかりであるが、多くの人が自分の自動車で十分にガスを入れたり、スリップをさせたり、
 過激な運転技術を見せるためにその冬を利用した。

例文 4-45 では、pa-動詞に daudz 「たくさん」が伴うことで、共に用いられる接頭辞動詞 sapelnīt 「(たくさん) 稼ぐ」(基動詞 pelnīt 「稼ぐ」)と共通の意味になっている。

例文 4-45 (D. 02.09.2000)

Šogad (..) varēšu daudz pastrādāt un sapelnīt direktoram daudz naudas.
 今年 できる-未1単 たくさん PA-働く そして たくさん稼ぐ 社長-与 たくさん 金
 今年はたくさん働き、社長のためにたくさんのお金を稼げる。

Mustajoki & Pussinen は程度の強さを示す副詞が縮減アスペクトの動詞に伴うことで、基動詞と po-動詞の中間の程度を示し、程度の濃淡 (gradacija) が出るとしている (Mustajoki & Pussinen 2008, 262)。それに対して Karavanov は、縮減アスペクトの動詞と程度の強さを示す副詞の共起を、動詞が示す主観的態度と関連づけている (Karavanov 2006, 111)。

接頭辞の意味と異なる副詞の共起には、いくつかの解釈が可能である。例えば「少し」という縮減アスペクトの意味ではなく、PFV の動詞としての具体性や、動作の見込みや試みといった意味要素が前面に出ると解釈できる。しかし次節で見ると、動作の弱さといった縮減アスペクトよりも話者の主観的評価が前面に出ることがある。このことから Karavanov の指摘するように、接頭辞の示す動作の弱さと、副詞が示す動作の強さの共起という矛盾を主観的評価の表示が打ち消しているとも考えられる。

4.6. 縮減アスペクトの pa-動詞の主観的側面

pa-動詞の主観的側面は、客観的な時間幅を示す時間限定アスペクトよりも、動作の小ささや弱さを示す縮減アスペクトに現れる。動作を縮減する、つまり軽く捉えることで、話者による動作や動作に関係する事象への様々な主観的評価が見られる。名詞の指小形と同じように、pa-動詞が示す主観的評価は、形態的に特徴付けられた語が示すもの(指小形であれば主に名詞、pa-動詞であれば動詞が示す動作)に直接向けられたものの他に、動作に広く関連する事象に向けられている。

本節では「少し」という縮減アスペクトを通して表出される主観的評価を大きく肯定的評価と否定的評価に分けて論じる。しかし指小形が表す主観的評価が常に明確に肯定的・否定的評価に区別することができないように、本節での分類も絶対的なものではないこと

は 断っておかなければならない。

主観的側面が確認される文脈には、趣味、子供や親しい人が関わる事象、社会・政治批判といった文の内容やテキストの性格が大きく関係している。主観的な態度を示す指小形の使用や、主観的な態度がよく表示される言語場面、つまり口語でよく用いられる語彙の使用も、pa-動詞を含む文脈に特徴的である。

言語の主観的側面をできるだけ客観的に記述するため、同じテキスト中で pa-動詞と基動詞の用例がある場合には、比較のためにその両方を示す。同じ意味を持つ接頭辞が複数の動詞を結びつける役割を果たし、いかにその接頭辞が文脈において必要であるのかということも示すため、pa-動詞が接頭辞クリップの関係にある用例を積極的に挙げる。

4.6.1. 肯定的評価

動作の短い時間を示すのではなく、縮減アスペクトとして動作を心理的に軽く捉えることで、動作自体や動作に関わる事象に対する肯定的な評価が示される。4.4.3.で挙げた例文 4-30 は、趣味として行う動作や余暇の過ごし方などの習慣的動作が pa-動詞で示されている。

例文 4-30 (AU. 29.05.2010)

„Nemeklēju kompāniju, drīzāk cenšos, lai mani nepazīst, mierīgi
否-探す-現1単 仲間-対 むしろ 努力する-現1単 ために 私-対 否-気づく-現3 落ち着いて
palasu, paklausos mūziku.” Nedaudz pabraucot uz Ainažu pusi, viņai
PA-読む-現1単 PA-聞く-現1単 音楽-対 少し PA-運転する-副へ Ainaži-属 方面 彼女-与
ir arī dārziņš, kur atpūsties pēc saspringtas dienas darbā.
be-現3 も 庭-指 関代 休む 後で 緊迫した 日-属 仕事-位

「[余暇の際は]一緒に過ごす人を探すというよりも、誰にも見つからないようにしている。静かに読書をしたり、音楽を聞いたりする。」Ainažiの方へすこしドライブに行くと、彼女には仕事で張り詰めた一日の後で休める庭(指小形)もある。

例文 4-46 と例文 4-47 は育児雑誌からの引用であり、子供と行う一連の動作が pa-動詞で示されている。例文 4-48 は子供向けのイベントに関する新聞記事からの引用である。

例文 4-46 (MM. 6.2010)

Ar mazajiem kopā padziedu, padejoju, paspēlējos.
と 子供-複 共に PA-歌う-現1単 PA-踊る-現1単 PA-遊ぶ-現1単
私は子供たちと一緒に歌ったり、踊ったり、遊んだりする。

例文 4-47 (MM. 6.2010)

Kad atbrauc pilsētas ome, viņa saved visādas interesantas
時 来る-現3 街-属 おばあちゃん 彼女 (沢山) 持つてくる-現3 あらゆる 面白い
grāmatīņas, ko kopā palasīt, palīmēt, pakrāsot.
本-複対 関代 とともに PA-読む PA-貼る PA-塗る
街に住んでいるおばあちゃんがあると、一緒に読んだり、お絵かきをしたり、塗り絵ができるような色ん

な面白い本（指小形）をたくさん持ってきてくれる。

例文 4-48 (BNS. 01.04.2008)

Abi draugi aicinās bērnuš pajandalet, pafigurēt un pamieloties
 両方 友人-複 誘う-未3 子供-複対 PA-馬に乗る PA-姿を見せる そして PA-おいしいものを食べる
 ar gardo jubilejas torti.
 で おいしい 記念日-属 ケーキ

2 人のお友達 [イベントのマスコット] はお馬さんに乗ったり、ちょこっと姿を見せたり、おいしい記念
 のケーキを食べに来るよう子供達を誘う。

育児と夫婦同士の関係が述べられたインタビューからの引用である例文 4-49 と例文 4-50
 では、基動詞 *lutināt* 「甘やかす」とその *pa*-動詞が用いられている。*pa*-動詞の使用には、動
 作の客体、つまり子供や配偶者に対する話者の肯定的な評価が見られる。夫婦のうちどち
 らが子供を甘やかすかという例文 4-49 においては、基動詞と *pa*-動詞が用いられている。ま
 た他の *pa*-動詞 *pažēlot* 「哀れむ」との接頭辞クリップも確認される。

例文 4-49 (NRA. 17.02.2007)

– (..) viens savas atvases vairāk audzina, norādot, ko drīkst, ko
 一方の 自分の 子供-複対 多く-比 育てる-現3 指示する-副 何-対 してもよい-現3 何-対
 nedrīkst, bet otrs vairāk pažēlo un palutina. Kā
 否-してもよい-現3 しかし もう一方 多く-比 PA-憐れむ-現3 そして PA-甘やかす-現3 いか
 ir jūsu ģimenē?
 be-現3 あなたの 家族-位

– Normunds: Es negribētu teikt, ka viens lutina vairāk, otrs mazāk.
 私 否-したい-願 言う 従 一方 甘やかす-現3 多く-比 もう片方 少なく-比

Bet (..) es vairāk palutinu.
 しかし 私 多く-比 PA-甘やかす-現1 単

— 片方 [の親] が、していいこと、いけないことを指示して自分の子供をより躱けるのに対して、もう
 片方 [の親] は、より [子供を] かわいそうに思い、甘やかしてあげる。お宅の家族ではどうですか？

— Normunds: 片方がより甘やかして、もう片方があまり甘やかさないっていうわけじゃないけど。でも
 僕の方が甘やかすね。

例文 4-50 では、夫婦間でどちらがどちらに甘えることがあるかが話題となっている。

例文 4-50 (NRA. 17.02.2007)

– Kurš kuru vairāk lutina?
 どちら どちら-対 多く-比 甘やかす-現3

– Liene: Ir reizes, kad viņš mani vairāk lutina, un ir reizes, kad
 be-現3 回-複 時 彼 私-対 多く-比 甘やかす-現3 そして be-現3 回-複 時
 es viņu palutinu.
 私 彼-対 PA-甘やかす-現1 単

— どちらがどちらをより甘やかしますか？

— Liene: 彼の方が私をより甘やかしてくれることもあれば、私が彼を甘やかしてあげることもある。

例文 4-51 の記事では、今日の検察官と弁護人の過剰な敵対関係が問題視されている。昔は公判外で仲が良く、コーヒーやコニャック（指小形）を少し飲みながら雑談（色々なおしゃべり、相手のミスの批判、相手のうまさの賞賛）をしていたことが pa-動詞で示されている。判決後に相手側の失敗を正面から皮肉ることも、裁判中は対立する相手を正面から褒めることもなかったことから、縮減のアスペクトの意味が認められる。記者は pa-動詞を用いて、検察官と弁護人の“古き良き時代”の人間関係を肯定的に描写している。

例文 4-51 (NRA. 31.05.2012)

Pagātnē ir laiki, kad (..) starpbrīdī kopā dzēra kafiju un parunājās par
過去-位 be-現3 時代-複 時 休憩-位 共に 飲む-過3 コーヒー-対 そして PA-話す-過3 ついて
dzīvi. Pagātnē ir laiki, kad pēc sprieduma pasludināšanas abas puses varēja
人生 過去-位 be-現3 時代-複 時 後で 判決-属 公表 両 側 できる-過3
iedzert konjaciņu, paironizējot par otra kļūdām un paslavējot par
少し飲む コニャック-対-指 PA-皮肉る-副 ついて 相手-属 誤り-複 そして PA-褒める-副 ついて
veiksmēm, tādējādi faktiski bagātinot juridisko domu.
成功-複 そうすることで 事実上 豊かにする-副 法律の 考え-対

昔は、休憩のときに一緒にコーヒーを飲んで、いろいろおしゃべりをする時代があった。昔は、判決の言い渡しの後で双方が相手の失敗を皮肉ったり、成功を褒めたりして、実際には法律に関する考えを充実させながら、コニャック（指小形）を口にできた時代もあった。

例文 4-52 では、お気に入りのボディケアで行う動作が pa-動詞 (parīvēties 「(自分を) 摩擦する、摩擦してもらう」、pamasēties 「(自分を) マッサージする、してもらう」と padarboties 「従事する」) で列挙されている。

例文 4-52 (MJ. 11.09.2010)

Iveta atklāj, ka viņai patīk dažādas ķermeņa kopšanas procedūras :
明かす-現3 従 彼女-与 好きだ-現3 様々な 体-属 ケア-属 手順-複
parīvēties, pamasēties, ar scrubjiem padarboties, kontrastdušā ieiet.
PA-摩擦する PA-揉む で スクラブ-複 PA-する 温冷シャワー-位 入る

Iveta は摩擦やマッサージ、スクラビングをしたり、温冷シャワーを浴びたりするなど、様々なボディケアが好きであることを明かした。

例文 4-53 と例文 4-54 でも、動作の主体が好む活動が pa-動詞で示されている。動作の主体は例文 4-53 ではスポーツクラブの選手たち、例文 4-54 では 1 人称単数の「私」である。

例文 4-53 (RB. 09.08.1996)

Un viņiem klubā nav garlaicīgi : gan pašaudīt var, gan paskriet, gan
そして 彼ら-与 クラブ-位 否-be-現3 退屈だ も PA-射撃する できる-現3 も PA-走る も
pavizināties, gan pamēroties spēkiem, gan kaut ko lietderīgu uzzināt.
PA-ドライブをする も PA-量り合う 力-複具 も 何か-対 有益な 知る

そして彼ら [選手たち] はクラブで退屈をしない。射撃もできるし、ランニングもできるし、ドライブもできるし、力比べもできるし、何か役に立つことを知ることもできる。

例文 4-54 (SA. 14.07.2009)

Man patīk sporta veidi, kur vajag pasvīst, paskriet, padomāt.
私-与 好きだ-現3 スポーツ-単 種目-複 関代 必要だ-現3 PA-汗をかく PA-走る PA-考える
私は一汗かいたり、一走りしたり、ちょっと頭を使うことが必要なスポーツが好きだ。

同じ新聞記事中の同一人物の発言では、基動詞と pa-動詞が用いられている。例文 4-55 と例文 4-56 それぞれの pa-動詞と基動詞の差異は、発言の長さではなく発言のトーンの違いに過ぎない。それは pa-動詞を含む例文 4-55 に superduper 「超すごい」という口語が用いられていることにも裏付けられている。

例文 4-55 (D. 02.02.2009)

„Es neizmantoju kaut kādas superduper lakas,” paironizē Anna.
私 否-使う-現1単 何か 超すごい ニス-複対 PA-皮肉を言う-現3
「私は超すごいニスみたいなものは使っていないの」と Anna は皮肉を言う。

例文 4-56 (D. 02.02.2009)

„Mēs esam tie, kas taisa skaistas bildes,” ironizē Anna.
私達 be-現1複 人達 関代 作る-現3 美しい 写真-複対 皮肉を言う-現
「私達は美しい画像を作る人たちなの」と Anna は皮肉を言う。

4.6.2. 否定的評価

肯定的評価とは逆に、縮減アスペクトの pa-動詞による否定的評価も観察される。

好ましくない志願者の特徴を示す雇用条件が述べられた文脈の例文 4-57 がある。nevis A, bet B 「A ではなくて B」という構文で、基動詞 strādāt 「働く」と pa-動詞が対比されている。pa-動詞は「短期間働く」という意味にも取れるが、仕事に対する軽い気持ちや試み程度の気持ちを持っている人はお断りという解釈ができる。例文 4-58 でも、働くことへの軽い気持ちが pa-動詞により示されている。

例文 4-57 (G)

Nevēlamas īpašības : Vēlme nevis strādāt, bet pastrādāt / piestrādāt.
否-望ましい 特徴-複 意欲 でなく 働く しかし PA-働く 副業で働く
望ましくない特徴：働く意欲ではなく、ちょっと働いてみたり、副業で働こうとする意欲。

例文 4-58 (ST. 21.11.2009)

Aizeju uz kādu dārzu, pastrādāju, pahalturēju, pāris latiņu nopelnu,
行く-現1単 へ どこかの庭 PA-働く-現1単 PA-お勤めする-現1単 2,3 ラッツ-複-指 稼ぐ-現1単
bet tā nav dzīve!
しかし それ 否-be-現3 人生
どこかの庭へ行って、ちょっくら働いて、ちょっくらお勤めして、2,3 ラッツ (指小形) を稼ぐのもいいけど、そんなの人生じゃない!

動作に対する軽い気持ちを表す pa-動詞は、以下の例文 4-59 にも見られる。海外でボクシングをするボクサーが、賞金額が少ないラトヴィアでの試合に参加しないことを述べる際に pa-動詞（基動詞 *boksēties* 「ボクシングをする」）が用いられている。参考までに同じ新聞記事中の基動詞を含む例文 4-60 も記す。

例文 4-59 (RB. 21.03.2005)

Neviens sevi cenošs bokseris nebrauks uz Rīgu tāpat vien paboksēties.
 誰も 自分-対 尊敬する-能現 ボクサー 否-行く-未3 へ リーガ 単に PA-ボクシングをする
 自尊心のあるボクサーで、単にボクシングをするためにリーガに行く奴なんて誰もいない。

例文 4-60 (RB. 21.03.2005)

Mans mērķis 5000 skatītāju klātbūtnē bija boksēties savā stilā (..).
 私の 目標 観客-複属 出席-位 be-過3 ボクシングをする 自分の スタイル-位
 5000 人の観客を前にした俺の夢は、自分のスタイルでボクシングをすることだった。

話者が無意味とする動作に pa-動詞が用いられることもある。例文 4-61 では、ホテルで一人行う動作が pa-動詞で示されている。

例文 4-61 (NRA. 04.01.2011)

Bet tad aizeju uz viesnīcu un esmu viena. Ko darīt? Pasēdēt Skype,
 しかしでは 行く-現1単 へ ホテル そして be-現1単 一人 何-対 する PA-座っている
paskaipot ar kādu? Vienalga - esi viena.
 PA-スカイプをする と 誰か どちらにせよ be-現2単 一人

[世界各地で公演する音楽家が夜ホテルですることについて] でもその後でホテルに行っても私は一人きり。何をすればいいの？スカイプでもやって、誰かと話でもするの？どちらにせよ一人のままでしょ。

インタビュー記事からの例文 4-62 では、自身に対する批判的なコメントを読む（基動詞 *lasīt* 「読む」）のかという質問に対し、話者は pa-動詞で答えることで、批判を間に受け止めない態度を示している。

例文 4-62 (K. 9.2009)

- Vai tu tos lasi?
 か 君 それ-複対 読む-現
- Dažreiz palasu, bet pats nekad neko neesmu komentējis.
 時々 PA-読む-現1単 しかし自分で 一度も 何も-対 否-be-現1単 コメントする-能過
- 君はそれ [批判を含むコメント] を読むの？
- 時々読む。でも自分では一度も、何もコメントしたことはない。

例文 4-63 は女優の発言であり、俳優の仕事では批判をまともに聞いて涙を流してはいけな、という趣旨で pa-動詞が用いられている。批判を聞いて泣くことの時間的な短さや順次性のタクシスの表示の他に、批判を引きずらないという話者の姿勢が見られる。

例文 4-63 (D. 14.08.2010)

Nu, ja ir kāds aizvainojums, rūgtums, es paklausos, paraudu kaut kur kaktiņā
 助 もし be-現 何かの 中傷 苦さ 私 PA-聞く-現1単 PA-泣く-現1単 どこかで 角-位-指
 un - visi ejam tālāk. Tas ir sāpīgi, bet laikam šajā amatā normāli.
 そして みな 行く-現1複 先へ それ be-現3 痛い しかし 多分 この 職業-位 普通である
 まあ、もし中傷やつらいことがあっても、私はそれを聞いて、どこか隅（指小形）で泣くだけ。私達は前
 に進むわ。それは痛みがあることだけど、この職業では普通のこと。

時間対格を伴う時間限定のアスペクトの pa-動詞でも、縮減アスペクトのように話者の主観的評価を示すことがある。この場合、pa-動詞と基動詞の意味的対立は PFV と IPFV のアスペクト対立だけでなく、主観的評価の有無の対立でも説明できる。

例文 4-64 は、試合で長らく結果を出せなかったが、試合直前に良い練習をしたことで結果を出したスポーツ選手の発言である。これまでの練習方法の描写では、基動詞 trenēties「練習する」とその pa-動詞が用いられ、どちらも同じ時間対格 trīs dienas「3日間」を伴っている。3日間の練習と、その後2日間のオフを挟んだ試合直前の3日間の練習では、練習時間は全く同じ3日間である。

例文 4-64 (D. 28.04.2010)

„Manam treniņdarbam nebija īstas sistēmas. Trīs...dienas trenējos, un tad divas
 私の トレーニング-与 否-be-過3 真の 体系-属 3 日-複対 練習する-過 そして それで 2
 dienas atpūtos ar draugiem. Tad vēl trīs...dienas patrenējos un braucu
 日-複対 休む-過1単 と 友人-複 それで まだ 3 日-複対 PA-練習する-過1単 そして 行く-過1単
 uz turnīru. (..) Pēdējās trīs dienās es nopietni trenējos un, lūk, rezultāts.”
 へ 試合 最後の 3 日-複位 私 真剣に 練習する-過1単 そして ここに 結果
 「僕のトレーニングにはしっかりした体系がなかった。3日練習したら、2日友達と休んだ。それからさらに3日練習して、試合に行った。ここ3日は真剣に練習していた⁷²から、見ての通り、結果がついてきた」。

話者は、試合前の3日間十分な姿勢で練習に取り組んだ（基動詞）からこそ、今回よい結果が出せたと述べている。しかしこれまでの練習では、3日間練習をして、2日間休んでも、試合直前の3日間の練習に然るべき姿勢で臨んでおらず（pa-動詞）、結果がついてこなかった。接頭辞 pa-の有無は、話者の練習に取り組む姿勢の差異となっている。

時間限定アスペクトに縮減アスペクトが組み合わさり、pa-動詞が主観的評価を示す例には、教会の塔を占拠した政治団体のデモについての例文 4-65 もある。基動詞 demonstrēt「デモをする」と pa-動詞は同じ時間対格 divas stundas「2時間」を伴い「2時間のデモ」を示している。pa-動詞は動作をひとまとまりに捉える PFV のアスペクトを示しているだけでなく、話者の主観的評価を示している。

⁷² 動詞は第2変化に属し、1人称単数形の場合に現在時制 trenējos「練習する」と過去形 trenējos「練習した」が同形となる。時間の範囲を示す時間位格 pēdējās trīs dienās「ここ3日では」を伴う2つ目の基動詞は、文脈上過去時制と考えられる。

例文 4-65 (JA. 20.11.2000)

Piektdien importa nacbolševiki uztika Pēterbaznīcas tornī un divas
 金曜日に 輸入-属 国粋ポリシェビキ主義者達は 登る-過 ペーテリス教会-属 塔-位 そして 2
 stundas tur demonstrēja. Divas stundas pademonstrējuši un brangi
 時間-複対 そこで デモをする-過 3 2 時間-複対 PA-デモをする-能過 そして よく
 nosaluši, padevās policijai.
 凍える-能過 屈する-過 3 警察-与

輸入に関して国粋ポリシェビキ主義を取る者達は金曜日にペーテリス教会の塔に登り、2時間そこでデモを行った。2時間デモを行い、ひどく凍えてしまった彼らは、警察に屈した。

基動詞では2時間のデモの事実を示しているだけであるのに対し、2時間のデモで凍えてしまったデモ参加者たちが警察に屈したことについて、書き手は pa-動詞を用いることで、デモ参加者に対する皮肉を示している。この皮肉は凍えた様子に対して用いられている口語の副詞 brangi「素晴らしく」によっても強められている。

この例文 4-65 では、PFV の動詞としての pa-動詞は能動過去分詞で、「…してから」という付帯状況を示す分詞構文で用いられている。基動詞に対応する PFV の動詞でもあり、一定の、もしくは長い持続時間を示す持続アスペクトの no-動詞にも選択の可能性はあるが、pa-動詞が表出する主観的評価が no-動詞によっても同様に示されるとは言い難い。例文 4-64 でも同様に、pa-動詞を no-動詞 trīs dienas notrenējos「3日間練習した」に置き換えた際には主観的評価は表出されず、持続アスペクトとしての継続時間の長さしか示されない。

否定的な主観的評価は、社会の関心や批判を集める政治家に対して向けられることが多い。基動詞 bankrotēt「倒産する」の例文 4-66 も、pa-動詞の例文 4-67 も、同一の倒産した会社の経営者の政治家が話題となっている。どちらの例文でも基動詞と pa-動詞の「倒産する」は彼の会社 Auseklītis を修飾しているが、pa-動詞の有無により文全体のトーンが異なる。基動詞の例文 4-66 では、彼の裁判への出廷が述べられているだけである。それに対して pa-動詞の例文 4-66 では、「ラトヴィアで最も頭のいい 100 人が国会に選ばれた」という彼の発言が取り上げられ、書き手は彼自身や彼の発言自体に否定的評価を示している。

例文 4-66 (VAVZ. 21.03.2000)

Bijušais Saeimas deputāts un par krāpšanu notiesātais bankrotējušās firmas
 元 国会-属 議員 そして 対して 詐欺 有罪とする-受過 倒産する-能過 会社-属
 «Auseklītis» vadonis Valdis Krisbergs bija viens no pirmajiem, kurš ieradās uz
 指導者 be-過 3 1人 から 最初の人-複 関代 現れる-過 3 へ
 «Pērkoņkrusta» prāvu.
 Pērkoņkrusts-属 裁判

元国会議員で詐欺罪で有罪判決を受け、倒産した Auseklītis 社の代表である Valdis Krisbergs は、Pērkoņkrusts 事件の裁判に出廷した最初の一人であった。

例文 4-67 (RB. 29.01.1996, RB. 05.03.1996)

Pabankrotējušā "Auseklīša" līdzīpašnieks un tagad Saeimas deputāts Krisbergs publiski
 PA-倒産する-能過 Auseklītis-属 共同経営者 そして 現在 国会-属 議員 公に

paziņoja, ka šajā Saeimā ievēlētās 100 gudrākās galvas Latvijā...
 知らせる-過3 従 この 国会-位 選出する-受過 賢い-比 頭-複 ラトヴィア-位

倒産した Auseklītis 社の共同所有者で、現在国会議員の Krisbergs は、今期の国会にラトヴィアで最も頭のいい100人が選ばれた、と公の場で知らせた…。

他国の首相と大臣を比較して、威厳のない自国の首相とやる気のない政治家を批判した例文 4-68 では、大臣たちが首相の前で行う一連の動作が pa-動詞で示されている。動詞 pļāpāt 「おしゃべりする」から派生した名詞 pļāpātava 「雑談会」ではなく、その pa-動詞から派生したと思われる papļāpātava⁷³ という語が用いられている。一般的でない形の語の使用も pa-動詞の文脈の特徴である（例文 4-73 も参照）。

例文 4-68 (NRA. 07.04.2011)

Pie Putina ministri iet ar trīcošām kājām, (..) bet pie Dombrovska iet
 元で プーチン-属 大臣-複 行く-現3 で 震える-能現 足-複 しかし 元で Dombrovskis-属 行く-現3
 kā uz garlaicīgu papļāpātāvu, kur interneta portālus valdības sēdes
 のように へ 退屈な おしゃべり部屋 関代 インターネット-属 ポータルサイト-複対 当局-属 会議-属
 laikā palasīt, pačatot un patvītot.
 時-位 PA-読む PA-チャットをする そして PA-ツイートする

大臣達はプーチンの元には足を震えさせて行くが、Dombrovskis [ラトヴィア現首相] の元には、閣僚会議の最中にインターネットのポータルサイトを読んだり、チャットをしたり、ツイッターをするために退屈な雑談会へ行くようだ。

例文 4-69 では、記者が国内の中継貿易政策に関して内務大臣を批判し、国内の通過貨物を運ぶ運転手に抗議を呼びかけている。基動詞 protestēt 「抗議する」は運転手たちに関連しているのに対して、pa-動詞は「抗議でもしてごらんなさい」と運転手たちの抗議を意に介さない内務大臣の発言として用いられている。実際に内務大臣がこのように発言をしたかは不明であるが、記者は内務大臣の発言に pa-動詞を使うことで、運転手たちの抗議を過小評価して軽蔑的な態度をとる内務大臣の人物像を批判的に描いている。

例文 4-69 (AP. 08.08.2007)

(..) jums, ienāks prātā protestēt pret to, ka valstij jūsu vestās
 あなた-与 入って来る-未3 理性-位 抗議する 対して そのこと 従 国-与 あなた-属 運ぶ-受過
 tranzītpreces dod ieņēmumus (..) Te jums «principiāla» atbilde no šīs
 通過貨物-複 与える-現3 収入-複対 ここで あなた-与 根本的な 答え から この
 valsts iekšlietu ministra personā — pamēģiniet tik paprotestēt, un viss!
 国-属 内務-複属 大臣-属 人-位 PA-試す-命2 複 ただ PA-抗議する そして すべて

⁷³ 動詞の不定形語尾-tを取り、場所を示す接尾辞-tav-を付加すると「…する場所」になる。しかしこのタイプの名詞は一般に、接頭辞動詞からは派生されない。名詞 pļāpātava が『新聞図書館』で62件あるのに対し、この語はこの記事を含めた2件の新聞記事でしか用いられていない(最終確認日:2012年8月2日)。もう一つの新聞記事(LA. 25.08.2011)は Sacima vai elitāra papļāpātava 「国会、またはエリートの雑談会」と題され、国会が単なる政治家達の雑談会として批判されている。

この pa-名詞は、2007年11月29日の国会答弁の場で議題となっていた国会対策委員会を指して、ある国会議員が皮肉で用いたことから話題を集めた (LV. 06.12.2007, BNS. 07.01.2008)。

あなた方〔運転手たち〕が運んだ通過貨物が国に収入を与えていることに対して抗議する気は起こらないんですか？この国の内務大臣の“根本的な”答えは、“抗議でもしてごらんなさい”だけです！

例文 4-70 では、他の政治家達が Godmanis 首相（当時）に圧力を加えているのではという指摘に対し、首相の顧問が異論を唱えている。この顧問は首相を擁護し、他の政治家達を tie lielie runātāji 「でかい口を叩く奴ら」と呼び、試しに首相を抑え込んでみろと pa-動詞を用いている。ここでは、首相を抑え込む試みが無駄に終わることが暗に示されているほか、基動詞 regulēt 「調整する」と比較をした際に、顧問は pa-動詞を使うことで他の政治家達に対する否定的な態度を示している。

例文 4-70 (ZZ. 15.12.2008)

Lai tie lielie runātāji aiziet un paregulē Godmani, es paskatīšos, kā
願 あの 大きい 話す人-複 行く-現3 そして PA-調整する Godmani-対 私 PA-見る-未1単 いか
tas viņiem izdosies! Godmani neviens nevar regulēt, ar viņu var
それ 彼ら-与 成功する-未3 Godmanis-対 誰も 否-できる-現3 調整する と 彼 できる-現3
tikai diskutēt, izmantojot pārliecinošus argumentus.
だけ 議論する 利用する-副 説得力がある 論拠-複対

でかい口を叩くやつらが行って Godmanis を抑えてみればいい。彼らがどうなるか私が確かめてあげよう。
Godmanis は誰にも抑えられない。彼に対してできることは説得力ある論拠を使って議論することだけだ。

例文 4-71 では、基動詞の administrēt 「司る」の pa-動詞で大臣に対する批判がなされ、大臣の退任を暗に求めている。

例文 4-71 (LK. 13.05.2003)

Nu, pietika mazliet integrācijas lietu ministram "paadministrēt", iejusties
助 十分である-過3 少し 統合-属 こと-複属 大臣-与 PA-仕切る 染まる
Repšes valdības garā un apņēmībā (..).
Repše-属 政権-属 気質-位 そして 覚悟-位

まあ、“ちょっとばかり大臣として働いて”、Repše 政権の気質と覚悟に染まれたのだから、社会統合大臣としては少しは満足だろう。

例文 4-72 では、順次性のタクシスを示す「来た」と「去った」の間にある動作に基動詞 pozēt 「ポーズを取る」の pa-動詞が用いられている。記念撮影のポーズを取る以外に何もせずに式典を去った大統領に対し、演説を期待していた話者は pa-動詞を用いている。この pa-動詞にはポーズの時間的な短さの他に、ポーズを取る大統領への否定的な評価が示されている。順次性のタクシスにおいては、基動詞に対応する PFV の no-動詞も考えられるが、no-動詞の使用では主観的評価は表出されない。

例文 4-72 (LA. 29.03.2008)

"Mani represētie draugi vairāk nekā stundu gaidīja aukstā laikā, lai dzirdētu
私の 粛清する-受過 友人-複 以上 より 時間-対 待つ-過3 冷たい 天気-位 ために 聞く-願

prezidenta runu. Bet viņš tikai nolika ziedus, papozēja žurnālistiem
 大統領-属 演説-対 しかし 彼 ただ 置く-過3 花-複対 PA-ポーズを取る-過3 記者-複与
 un aizskrēja prom. Laikam represētos cilvēkus politiskā elite joprojām
 そして 走り去る-過3 離れて 多分 粛清する-受過 人-複対 政治的 エリート いまだに
 uzskata par naidniekiem," skumji secināja rīdziniece Alda (..).
 見なす-現3 と 敵-複 悲しく 結論づける-過3 リーガの人

「粛清された私の友人らは、大統領の演説を聞くために1時間以上も寒い中を待っていた。しかし彼は献花をし、記者たちにポーズを取っただけで、走り去ってしまった。エリートの政治家たちは、粛清された人をいまだに敵だと思っている」とリーガに住む Alda は悲しそうに結論づけた。

例文 4-73 で副詞 drusciņ 「ちょっと」を伴う pa-動詞（基動詞 arestēt 「逮捕する」）は、逮捕して短い時間拘留するという意味ではなく、“少し”や“たくさん”といった程度の概念とは結びつかない。ここでは検察などの公的機関や、逮捕されるべき政治家への批判が pa-動詞によって示されている。pa-動詞の周辺の語彙には、名詞 lieta 「件」と process 「訴訟」の指小形や、動詞 iešūpot 「眠らせる」に反復の接尾辞 -ā が付加されたと思われる動詞 iešūpāt⁷⁴ が用いられている。例文 4-68 の papļāpātava 「雑談会」（一般には plāpātava 「雑談会」）のような一般的でない語も、主観的評価を示す pa-動詞が表れる文脈を特徴付けている。

例文 4-73 (VZŽ. 23.03.2007)

(..) prokuroriem un KNABistiem derētu piekert arī dažas citas lietišas —
 検察官-複与 そして KNAB 職員-複与 役立つ-願 捕まえる も 幾つか 他の こと-複-指
 kaut vai bijušo kolēģi Šabansku tā drusciņ paarestēt. Un par laikraksta
 せめて 元 同僚-対 Šabanska-対 そのように 少し PA-逮捕する そして ついて 新聞-属
 "Diena" privatizācijas lietām procesiņu iešūpāt.
 私有化-属 こと-複 裁判-対-指 眠らせる

検察官や KNAB [汚職阻止撲滅局] は他の事件（指小形）の進展も遅らせるのがいいだろう。元同僚の Šabanska でもまあちょっと逮捕でもして。それに Diena 紙の私有化の件の訴訟（指小形）も滞らせて。

ある出来事は PFV・IPFV のどちらにも捉えることができる。2008年8月のロシアによるグルジア攻撃に関する記事では PFV の基動詞 bombardēt 「爆撃する」とその PFV の動詞 sabombardēt 「爆撃する」が用いられている。

例文 4-74 (MV. 07.08.2009)

2008. gada augustā Krievija okupēja Gruziju. Kopumā Gruziju bombardēja 75
 年-属 8月-位 ロシア 占領する-過3 グルジア-対 全体として グルジア-対 爆撃する-過3
 reizes. (..) Bombardēja visu Gruziju. Kāpēc?
 回-複対 爆撃する-過3 全 グルジア-対 なぜ

2008年8月ロシアはグルジアを占領した。グルジアを計75回爆撃した。グルジア全土が爆撃された。なぜ？

⁷⁴ 『新聞図書館』でもこの1件しか用例がない。

例文 4-75 (LA. 22.08.2008)

"Viņi visu ir nozaguši. Viņi visu ir sabombardējuši. (..)" teicis kāds
 彼ら すべて-対 be-現3 盗む-能過 彼ら すべて-対 be-現3 爆撃する-能過 言う-能過 ある
 Gori iedzīvotājs.
 住民

「奴ら [ロシア軍] は何もかも盗んだんだ。奴らは何もかも爆撃したんだ」とゴリのある住民は言った。

しかし程度が強く、縮減アスペクトには捉えにくい動作でも、pa-動詞が単に話者の主観的評価を示す用例が例文 4-76 の pa-動詞 pabombardēt である。爆撃の回数や強度、犠牲者の数や規模といった現実には、pa-動詞が示す縮減アスペクトには程遠い。しかし pa-動詞を用いることで、軽く、簡単にやり遂げられてしまう動作が描写され、その動作主や出来事全般に向けられた記者の否定的評価が示されている。さらに例文 4-76 では、基動詞 vizināties「乗り回る」とドイツ語起源の俗語の基動詞 slaktēt「殺す」の pa-動詞との接頭辞クリップが確認され、接頭辞 pa-の表す縮減アスペクトとその主観的評価の表示は、他の動詞によっても担われている。

例文 4-76 (D. 12.08.2008)

(..) vienreiz pavizinājusies ar tankiem citas neatkarīgas valsts teritorijā, vienreiz to
 一度 PA-乗り回る と 戦車-複 他の 独立した 国-属 領土位 一度 それ-対
pabombardējusi un paslaktējusi tur cilvēkus, bet nesaņēmusi (..) nosodījumu no
 PA-爆撃する-能過 そして PA-殺す-能過 そこで 人-複対 しかし 否-受け取る-能過 罰-対 から
 ietekmīgām starptautiskām organizācijām, Krievija, iespējams, to gribēs darīt vēl
 影響力のある 国際的な 組織-複 ロシア おそらく それ-対 したい-未3 する まだ
 un vēl.
 そして まだ

ある時は戦車で他の独立国家の領土内を乗り回り、ある時はその国家を爆撃し、そこの人々を殺し、しかし影響力のある国際機関からは罰を受けてこなかったロシアは、おそらくまだまだそれをしたがるだろう。

同様に、同じ出来事を IPFV の基動詞、対応の PFV の接頭辞動詞、そして pa-動詞で示す例がある。サッカーのフーリガンによるスタジアムの破壊行為について、一般的な事実基動詞 demolēt「破壊する」、「破壊された観客席」という受動表現に PFV の接頭辞動詞 izdemolēt が記事の地の文で用いられているのに対し (例文 4-77 と例文 4-78)、pademolēt はスタジアムがある自治体の広報担当者の発言で用いられている (例文 4-79)。3 つの例文とも同一の記事からのものである。

例文 4-77 (NRA. 03.06.2008)

Neatkarīgā jau rakstīja, ka Lietuvas futbola fani sestdien Slokā demolēja
 独立新聞 すでに 書く-過 従 リトアニア-属 サッカー-属 ファン-複 土曜日に Sloka-位 破壊する-過3
 stadiona tribīnes (..).
 スタジアム-属 観客席-複対

リトアニアのサッカーファンが Sloka でスタジアムの観客席を破壊したことは、すでに独立新聞が伝えた。

例文 4-78 (NRA. 03.06.2008)

Pagaidām futbola fanu izdemolēto Jūrmalas stadiona tribīņu remontu
 今のところ サッカー-属 ファン-複属 破壊する-受過 Jūrmala-属 スタジアム-属 観客席-複属 修理-対
 apmaksās Latvijas Futbola federācija (LFF).
 支払う-未3 ラトヴィア-属 サッカー-属 協会

現時点では、サッカーファンにより破壊された Jūrmala スタジアムの観客席の修理費は、ラトヴィアサッカー協会 (LFF) が支払う予定である。

フーリガン達の破壊行為は修理を要するほどのものであり、決して軽度の動作ではなかったはずである。しかし例文 4-79 の話者は pa-動詞を用いることで、破壊行為が大したことではないとし、破壊行為や破壊行為を行うフーリガン達を過小評価している。

例文 4-79 (NRA. 03.06.2008)

„Tas, ka sestdien stadionu pademolēja huligāni, nenozīmē, ka (..) vairāk
 それ 従 土曜日に スタジアム-対 PA-破壊する-過3 フーリガン-複 否-意味する-現 従 もはや
 neļausim Slokā rīkot futbola spēles. Huligāni ir visur, un
 否-許す-未1単 Sloka-位 行う サッカー-属 試合-複対 フーリガン-複 be-現3 あらゆる場所に そして
 ar to diemžēl jāreķinās.” Neatkarīgajai sacīja (..) Aldis Bērziņš.
 を それ 残念ながら 考慮に入れる-義 独立新聞-与 言う-過3

「土曜日にフーリガンがスタジアムを破壊したぐらいでは、Sloka でサッカーの試合を今後開催させないということにはならない。フーリガンはどこにでもいるし、それは残念だが考慮にいれなければいけない」と Aldis Bērziņš は独立新聞に語った。

以上、縮減アスペクトをもとに肯定的・否定的な主観的評価を示す pa-動詞の用例を考察した。pa-動詞は縮減アスペクトの意味を残している場合もあれば、残していない場合もあるが、これらの用例では、アスペクトの意味よりも主観的評価の意味が前面に出る。特に同じ事象に対して IPFV と PFV のアスペクト対立を示す基動詞とある接頭辞動詞に並行して用いられる pa-動詞は、基動詞や他の接頭辞動詞と比較をすることでその主観的評価が特定しやすい (例文 4-74 と例文 4-75 に対する例文 4-76、例文 4-77 と例文 4-78 に対する例文 4-79)。

4.6.3. 二重接頭辞の動詞における接頭辞 pa-

ラトヴィア語では一般に動詞は 1 つの接頭辞しか持たない。しかし接頭辞動詞にさらに接頭辞 pa-が付加された二重接頭辞の pa-動詞がある。これらの pa-動詞は形態的にラトヴィア語の動詞の中では少数であるが、これらの pa-動詞も縮減アスペクトを持ち、それを元に主観的評価を示す。形態的に一般的でないがゆえに、既存の接頭辞動詞にさらに pa-を付加する行為にはより強い活動的性格が認められる。

4.6.3.1. 二重接頭辞の動詞

ラトヴィア語の動詞に2つの接頭辞が付加されるのは、前から2番目の接頭辞がアスペクト的意味や空間的意味で基動詞を修正していない場合で、基動詞と強い結びつきを持ち語彙化している時に限られる⁷⁵。例えば基動詞 *dot* 「与える」に対する接頭辞動詞 *pārdot* 「売る」(無アスペクト)があり、そこから *izpārdot* 「売りつくす」といった2つの接頭辞が付加された動詞ができる。表4-5で示すように、2つの接頭辞を持つ動詞は、基動詞だけではあまり使われなかったり、基動詞と接頭辞動詞に大きな意味の変化がある動詞である。

表4-5：語彙化した接頭辞動詞と二重接頭辞の動詞

基動詞	語彙化した接頭辞動詞	最初から2番目の接頭辞が語彙化している二重接頭辞の動詞
<i>zīt</i> 「知っている、知る」	<i>pazīt</i> 「知っている、知る」 (より一般的)	<i>iepazīt</i> 「知るようになる」 <i>iepazīties</i> 「知り合いになる」 <i>sapazīties</i> 「知り合いになる」 <i>atpazīt</i> 「見分ける」 <i>uzpazīt</i> 「知る」
<i>līdzēt</i> 「助ける」	<i>palīdzēt</i> 「助ける」 (より一般的)	<i>izpalīdzēt</i> 「救う」 <i>piepalīdzēt</i> 「助ける」
<i>tikt</i> 「気に入らせる」	<i>patikt</i> 「気に入らせる」 (より一般的)	<i>izpatikt</i> 「おべっかを使う」 <i>iepatikties</i> 「気に入り始める」
<i>likt</i> 「置く」	<i>palikt</i> 「残る」	<i>atpalikt</i> 「遅れる」 <i>izpalikt</i> 「起こらない」
<i>dot</i> 「与える」	<i>pārdot</i> 「売る」	<i>izpārdot</i> 「売りつくす」

『新聞図書館』においては、接頭辞が語彙化した動詞に接頭辞 *pa-*が付加された動詞が少数ながら見つかった⁷⁶。これらの動詞は大きく2つのタイプの接頭辞動詞に付加される。一つは接頭辞が語彙化しており、基動詞と意味が異なる無アスペクト動詞に付加される場合、もう一つは基動詞とアスペクト対立をなすPFVの接頭辞動詞に付加される場合がある。どちらのタイプの動詞も時間限定のアスペクトではなく、すべて縮減アスペクトを示している。表4-6では、二重線で2つのタイプを区切る。

⁷⁵ この点でロシア語はより自由である。例えば *ponavydumat'* 「たくさんを少しずつ考え付く(分配)」または「たくさんを思い付く(縮減)」という動詞がある。接頭辞 *po-*は分配や縮減のアスペクトを、*na-*は「たくさん」という飽和のアスペクトを示す。これらの接頭辞は *vydumat'* 「思い付く」を意味修正している。接頭辞 *vy-*は *dumat'* 「考える」に付加され、語彙化している。

⁷⁶ 本論文筆者は接頭辞 *pa-*と一連の接頭辞を付加し(例：*paaiž**, *paap**...)、これらの *pa-*動詞を収集した。

表 4-6：接頭辞 pa-が付加された二重接頭辞の動詞

最終確認日：2012年8月2日

pa-動詞	語彙化した接頭辞動詞	基動詞
papiedalīties (2)	piedalīties 「参加する」	dalīties 「共有する」
paizmantot (2)	izmantot 「利用する」	mantot 「受け継ぐ」
papielietot (1)	pielietot 「適応させる」	lietot 「利用する」
paizmeklēt (1)	izmeklēt 「捜査する」	meklēt 「探す」
paapčakarēt (1)	apčakarēt 「だます」	čakarēt 「ほじる」
paapvainoties (1)	apvainoties 「怒る」	vainot 「罪をなすりつける」
panodarboties (1)	nodarboties 「従事する」	darboties 「働く」
pauztraukties (1)	uztraukties 「不安になる」	traukties 「疾走する」
paizklaidēties (1)	izklaidēties 「娯楽に興じる」	-
pa-動詞	基動詞に対して PFV の接頭辞動詞	接頭辞動詞に対して IPFV の基動詞
panolemt (1)	nolemt 「決心する」	lemt
pauzbūvēt (1)	uzbūvēt 「建設する」	būvēt
panodemonstrēt (1)	nodemonstrēt 「見せる」	demonstrēt
panolaist (1)	nolaist 「降ろす」	laist lejā

4.6.3.2. 二重接頭辞の動詞における接頭辞 pa-の主観的側面

表 4-6 で示したこれらの pa-動詞は、縮減アスペクトを元に主観的評価を示す。

例文 4-80 では基動詞の *tielēties* 「意地をはる」と *dusmoties* 「怒る」、また接頭辞動詞 *apvainoties* 「気を悪くする」の pa-動詞による接頭辞クリップが見られる。母親が気分を害した程度が低いことが接頭辞 pa-により示されている。例文 4-81 も同様で、動詞 *izmeklēt* 「捜査する」の pa-動詞が副詞 *drusku* 「少し」と用いられ、捜査の規模の小ささや時間の短さが示されている。

例文 4-80 (LA. 27.05.2009)

(..) *mamma mazliet patielējās, it kā padusmojās un paapvainojās, bet*
 ママ 少し PA-意地をはる-過3 あたかも PA-怒る-過3 そして PA-気を悪くする しかし
pēc brīža tomēr norima.
 後で 時 やはり 落ち着く-過3

ママは少し意地をはって、怒って気を悪くしたようだった。でもしばらくして落ち着いた。

例文 4-81 (NRA. 15.02.2010)

(..) *jau divas reizes ticis ierosināts kriminālprocess, drusku paizmeklēts,*
 すでに 2 回-複 受-能過 起こす-受過 刑事訴訟 少し PA-捜査する-受過
tad atkal izbeigts.
 それで 再び 打ち切る-受過

すでに2回刑事訴訟が起こされたが、少し捜査がなされ、再び打ち切りになった。

接頭辞動詞から派生した pa-動詞は、縮減アスペクトを元に主観的評価を示す。例文 4-82 では動詞 *piedalīties* 「参加する」が「真面目な大統領」に対して用いられているのに対し、pa-動詞の使用により、国家行事よりもアイスホッケーの観戦を優先する自国の大統領が皮肉られている。この *papiedalīties* は、観戦の合間に国家行事に参加をする時間の長さだけでなく、大統領の国家行事への不真面目な姿勢を示している。例文中のドイツ語起源の口語 *funktierēt* 「思う」の使用とその伝聞法により書き手は事実への心理的距離をとり、皮肉の効果がより高まっている。

例文 4-82 (JA.13.04.1999)

(..) *nopietni* *prezidenti* (..) *mēdz* *piedalīties* *nopietnos* *pasākumos* , *bet* *mūsu* *gadījumā...*
 真面目な 大統領-複 できる-現3 参加する 真面目な 行事-複位 しかし私達-属 場合-位
 (..) *Prezidenta* *aparāts* *funktierējot* , *ka* *Ulmanis* *hokejskatīšanās* *starplaikos* *varētu* *arīdzan*
 大統領-属 機関 考える-伝 従 ホッケー観戦-属 合間-複位 できる-願 も
 kādās *valstiski* *svarīgās* *tikšanās* *papiedalīties.*
 何かの 国家的に 大切な 会談-複位 PA-参加する

真面目な大統領は真面目な行事に参加をするものだが、ラトヴィアの場合ときたら…。大統領府は、Ulmanis がホッケー観戦の合間をぬって重要な国家行事に参加してもいいと思っているらしい。

例文 4-82 と同じ記事からの例文 4-83 では、動詞 *izklaidēties* 「娯楽に興じる」の pa-動詞が用いられている。大統領の退任にはふさわしくない軍事用語の *demobilizācija* 「退役」を意味する俗語 *dembelis* が用いられることにより、風刺効果が高められている。

例文 4-83 (JA. 13.04.2009)

Lai *paizklaidējas* *pirms* *dembeļa.*
 願 PA-遊ぶ-現3 前に 退役
 退役前にひと遊びしておけばいい。

政治批判の新聞記事である例文 4-84 では、動詞 *izmantot* 「利用する」が条項の公式的な文体で用いられているのに対し、汚職を監視するはずの倫理委員会で、さらにあと少し汚職に身を委ねようとする国会議員達の姿を描写する際に pa-動詞が用いられている。

例文 4-84 (NRA. 13.10.2003)

Beidzot *oficiāli* *tika* *atļauta* *korumpošanās* , *un* *viens* *no* *punktiem* *skanēja*
 ついに 公式に 受-過3 許可する-受過 汚職すること そして 1つ から 条項-複 音がなる-過3
 šādi : « *Par* *pašcieņas* *trūkumu* *atzīstama* *deputātu* *pērkamība* *un* *ļaušanās*
 このように について プライド-属 不足 認める-受現 議員-複属 買収 そして 委ねること
 sevi *izmantot* *kādu* *savtīgu* *interešu* *nolūkos.*» *Deputāti* *strīpām* *vien* *devās* *uz*
 自分-対 利用する 何らかの わがままな 利益-複属 意図-複位 議員-複 列-複具 だけ 向かう-過3 へ
 Ētikas *komisiju* , *kur* *atzinās* , *ka* *sirgst* *no* *pašcieņas* *trūkuma* , *ļāva* *sevi* *vēl*
 倫理-属 委員会 関代 認める-過3 従 病気である-現3 で 自己尊敬-属 不足 許す-過3 自分-対 まだ

mazliet paizmantot (..).

少し PA-利用する

ついに汚職が公式に許可された。そして条項の一つはこのようであった：「プライドのなさを認められた議員たちの買収と自分のわがままな利益のために自分を利用すること」。議員たちは列を成して倫理委員会へ行き、プライドのなさに病んでいることを認め、さらに少し自分を利用することを許した。

新聞記者たちに暴言を吐く政治家を批判する記事では、これまでに彼が使った語彙を 150 語以上挙げ、例文 4-85 の文が続く。ここでは pa-動詞 papielietot 「適応させる」 (pielietot 「適応させる」 基動詞 lietot 「使う」) が用いられている。指小形 vārdušs 「語」 (元の名詞 vārds) や反語法の brangi 「素晴らしい」 (例文 4-65 でも同様) のような風刺効果を高める言語手段とともに、pa-動詞 は政治家に対する否定的評価を示している。

例文 4-85 (JA. 06.09.1999)

Un kādus tik Vārdušus bijušais ķīmiķis papielietoja! Brangi!

そしてどんな 助 語-複属-指 元 化学者 PA-使う-過3 素晴らしい

それに元化学者のくせになんて言葉 (指小形) を使ったんだ! 素晴らしいこった!

例文 4-86 では、pa-動詞 panolemt (PFV の接頭辞動詞 nolemt 「決める」、IPFV の基動詞 lemt 「決める」) が用いられている。政治家による児童売春の調査委員会を率い、「サメ」というあだ名を持つ政治家 Jānis Ādamsons は、児童売春に関わる政治家達の名を国会の場で公表した。これに対し検察庁長官 Jānis Maizītis は Ādamsons を政治家達に対する名誉棄損で刑事裁判にかかる許可を国会内の委員会に求めたが、委員会は検察の立件を支持しないことを決定した。

例文 4-86 (JA. 31.08.2000)

(..) veselas divas saeimas komisijas panolēmušas, ka nevajadzētu atdot saplosīšanai

全部 2 国会-属 委員会-複 PA-決定する-能過 従 否-必要がある-願 引き渡す 食いちぎること-与

pedofilķērāju runasvīru Haizivjādamsonu – Ādamsonhaizivi. Prokuratūras ģenerālis

小児性愛者を狩る者-対 スポークスマン-対 サメ-Ādamsons-対 Ādamsons-サメ-対 検察庁-属 将官

Jānis Maizītis gan turpina uzskatīt, ka esot savāķīts pietiekami daudz pierādījumu,

助 続ける-現3 考える 従 be-伝 集める-受過 十分に 多くの 証拠-複

lai Jānīti izdotu, tiesātu, sodītu (..).

ために Jānis-対-指 引き渡す-願 裁判にかかる-願 罰する-願

国会のどちらの委員会 [法務委員会と指令委員会] とも、小児性愛者狩りをするスポークスマンのサメ Ādamsons・Ādamsons サメを食いちぎりにさらす必要はないと決めた。検察庁将官の Jānis Maizītis は Jānis 君 (指小形) を引き渡し、裁判にかけ、罰するための証拠がたくさん集まったらしい、と考え続けている。

この事件に関して、委員会を主語とする動詞 nolemt は『新聞図書館』で見つからず、その他の表現 (neatbalstīja 「支持しなかった」や pieņēma lēmumu 「決定を下す」などの無アスペクトの接頭辞動詞) で示されていたため、実際の用例を用いて同じ状況に対する主観的評価の表出を接頭辞 pa-の有無で比較することはできない。しかしこの記事では、主観的評

価を示す pa-動詞に特徴的な言語形式や表現が用いられている。例文 4-86 では、問題の政治家 Ādamsons はフルネームではなくあだ名で呼ばれ、本来の ģenerālprokurors 「検事総長、検察庁長官」は prokuratūras ģenerālis 「検察庁将官」と言葉遊びがされている。動詞 savāķīt は savākt 「集める」に反復の接尾辞-īが付加された形と思われるが、一般的ではない。Ādamsons の名前の Jānis は指小形の Jānītis で用いられている。記事全体を通じて、書き手は事件そのものやその関係者らを皮肉的に描写している。

例文 4-87 から例文 4-89 は、「光の城 (Gaismas pils)」という呼称の国立図書館の建設をめぐる例文である。建設進行中の動作が話題の例文 4-87 では IPFV の基動詞 būvēt 「建設する」、建設の条件が話題の例文 4-88 でも IPFV の基動詞、建設全体にかかる予算が話題の例文 4-89 では PFV の接頭辞動詞 uzbūvēt 「建設する」が用いられている。

例文 4-87 (LA. 25.04.2008)

Mēs būvējam Gaismas pili, bet ar tumšu tāmi.
私達 建設する-現1 複 光-属 城-対 しかし で 暗い 予算
我々は光の城を建設中だが、その予算は不透明である。

例文 4-88 (LA. 05.11.2008)

Gaismas pili var būvēt tad, kad to varētu atļauties vairākums valsts
光-属 城-対 できる-現3 建てる その時 関代 それ-対 できる-願 許可をする 大部分 国-属
iedzīvotāju vai pat visi.
住民-複属 または さえ 皆
光の城を建てることができるのは、国民の大部分、もしくは全員がそれを許すような時である。

例文 4-89 (BNS. 29.09.2007)

Lētākais konkursā iesniegtais piedāvājums ir uzbūvēt Gaismas pili par 139
安い コンペ-位 提出する-受過 提案 be-現3 建てる 光-属 城-対 で
miljoniem latu (..).
100 万 ラツツ-複
コンペの最安の提案は、光の城を 1 億 3900 万ラツツで建設することである。

しかし例文 4-90 の書き手は、政治家達を指す puisī 「男の子たち」や国民の税金を指す graši 「銭」といった語彙と共に、PFV の動詞 uzbūvēt 「建設する」の pa-動詞を用い、巨額の費用で実行される公共事業やそれを主導する政治家らを批判している。

例文 4-90 (JA. 24.03.2000)

Un vēl atceras, kad tie puisī iedomājas par tautas sīkajiem grašiem gaismas
そしてまだ 覚えている-現3 時 その 少年-複 思いつく-現3 で 国民-属 細かい 銭-複 光-属
pili pausbūvēt.
城-対 PA-建てる
あの坊主たちが、国民のなけなしの銭で光の城を建設しようと決めた時のことは、まだ記憶に残っている。

辛辣なジャーナリストとして知られる Lato Lapsa による選挙批判のエッセイからの例文 4-91 では、pa-動詞 *paapčakarēt* 「だます」(接頭辞動詞 *apčakarēt* 「だます」、基動詞 *čakarēt* 「ほじる」、接頭辞 *ap-* はここでは語彙化された接頭辞) が用いられている。名詞 *stendzeniēks* は広告プランナーとして知られる男性の名字 *Stendzeniēks* の複数形で、その個人の特徴を持つ人々を集合的に示す(『標準語文法』1959, 385)。Co. は *kompānija* 「会社」の略号である。AP. はポータルサイトであり、このエッセイは電子媒体で掲載された。

例文 4-91 (AP. 01.08.2008)

Jo reizi četros gados paapčakarēt cilvēkus ar dažādu stendzeniēku un
 なぜなら 回-対 4 年-複位 PA-騙す 人-複対 で 様々な Stendzeniēks に似た人-複属 そして
 Co. palīdzību viņi ir iemanījušies gluži labi.
 会社 助け 彼ら be-現3 身につける-能過 とても よく
 なぜなら四年に一度、様々な扇動家と会社の力で人々を騙すことを、彼ら [批判対象の政治家] は上手く身につけたからだ。

紙媒体と電子媒体の伝達手段を持つ新聞社 NRA. では、同ジャーナリストの同エッセイが部分的に引用されている。しかし『新聞図書館』に提供された記事を見ると、例文 4-91 にあった pa-動詞の接頭辞 *pa-* は、引用先の例文 4-92 では削除されている。

例文 4-92 (NRA. 02.08.2008)

Jo reizi četros gados apčakarēt cilvēkus ar dažādu stendzeniēku un
 なぜなら 回-対 4 年-複位 騙す 人-複対 で 様々な Stendzeniēks に似た人-複属 そして
 Co. palīdzību viņi ir iemanījušies gluži labi.
 会社 助け 彼ら be-現3 身につける-能過 とても よく
 なぜなら四年に一度、様々な扇動家と会社の力で人々を騙すことを、彼ら [批判対象の政治家] は上手く身につけたからだ。

記者が接頭辞 *pa-* に込めた否定的な評価が削除された原因には、二重の接頭辞の *pa-* 動詞自体が形態的に標準的でないという規範意識があることが考えられる。また、接頭辞動詞 *apčakarēt* 「騙す」が文体的に中立的な *apmānīt* 「騙す」に比べ口語的であることや、エッセイ全体の論調により、接頭辞 *pa-* がなくてもテキストの風刺効果はすでに出されている。本章の 4.3.4.1. で検討した指小形の校閲のように、感情的側面を示す接頭辞 *pa-* が削除されたことは、校閲が保つべき文やテキストの命題には影響を与えるほどのものではないことを物語っている。

4.7. 第4章のまとめ

本章では、ロシア語を中心としたスラヴ諸語の縮減アスペクトの動詞が持つ主観的側面の先行研究をもとに、“動作の小ささ”を示すラトヴィア語の縮減アスペクトと、ものの小

さを示す名詞の指小形を比較し相関させることで、アスペクトと主観的評価が交差する一例を示し、動詞接頭辞付加に感情的側面があることを明らかにした。

指小と縮減アスペクトは、指小とアスペクトという異なる意味カテゴリーを形成し、それぞれ名詞、動詞という異なる品詞に属している。しかしどちらも接辞（接尾辞である指小辞と接頭辞）により、元の語の意味を修正する。指小形も pa-動詞も、ものや動作の小ささと話者の主観的評価を示す点が共通している。主観的評価の対象は、語が示すものや動作だけでなく、広くそのものや動作に関係する事象である。

接頭辞 pa-は、動作の短い持続時間を示す時間限定のアスペクトと縮減アスペクトを示す。動作の短い継続時間を示す時間限定のアスペクトは客観的な時間補語をとることから、指小形が示す実際のものの小ささに例えられる。縮減アスペクトは話者が動作を心理的に軽く捉えることからより主観的であり、指小形が示す主観的側面と類似している。実際に、pa-動詞は縮減アスペクトを残しつつ、または残さずに動作やそれに関係する事象への話者の主観的評価を示す。主観的評価は肯定的、否定的どちらの場合もある。また短い時間補語をとる時間限定のアスペクトの pa-動詞も、縮減アスペクトのように話者の主観的評価と結びついていることがあることも確認された。二重接頭辞の動詞で、語頭の接頭辞が pa-の場合、多くは否定的な主観的評価を示す。

指小形と pa-動詞の意味を分析するには、もとの名詞や基動詞の参照や文脈の考慮が不可欠である。主観的評価を示す pa-動詞の文脈には、主観的評価を同様に示す指小形や口語に特徴的な語彙、形態が一般的でない語彙の使用が目立つ。

指小形と pa-動詞は言語文化論で批判されることがあり、テキストの校閲でも削除される可能性があることも共通している。これは、主観的評価の表出が文の命題には大きく影響を及ぼさず、主観的評価の表示に社会的（文体的）制限があることを示す。主観的評価の表示は話者に大きく依存し、縮減アスペクトを元に主観的評価を示す接頭辞 pa-の付加には、活動的性格が認められる。特にこの性格は、新たに接頭辞を付加することが一般に許容されない二重接頭辞の pa-動詞の使用において強い。

本章では、動詞接頭辞付加が空間的意味やアスペクト的意味の表示だけでなく、感情的側面を持った言語活動であることを明らかにした。